大正九年十二月一日發行（毎月一回一日發行）大正九年十一月二十六日印刷納本 明治三十七年[illegible]月七日第三種郵便物認可

女子青年界

第十七巻 十二月號

目次

Digitized by Google

Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

第十七卷第十二號

女子青年界目次

大正九年十二月號

NAKAYAMA SHOTEN.

IVORY CARVER.

Manufacture of

Damascen Ware, Bamboo Sticks Wooden Works & Japanese Curios.

No. 27, Bentendori Nichome, Yokohama.

TEL. NO. (HONKYOKU) 597

横濱市辨天通二丁目
二十七番地

美術品並ニ
雜貨直輸出
卸小賣商

中山商店

電話本局五百九十七番

診察　毎夕五時――七時（日曜、祭日休）
　　　姙婦、産婦、乳兒、幼兒に限る
入院　姙婦産婦（食費一日三十錢）
保育　幼兒晝間保育（早朝――夕暮）

東京市本所區柳島梅森町五十五（錦絲堀終點下車）

賛育會本所産院

電話本所六〇三〇番、振替東京三九〇〇〇番

會員募集

通常會員毎月五十錢――一時金百圓以上
特別會員同　二圓――同　三百圓以上
維持會員同　五圓――同　千圓以上

理事長　醫學博士　木下正中

貴婦人紳士御愛用美髪料

ドクターベリース

ヘーアトニック　一瓶壹圓

Dr. Perry's Hair Tonic

起床時ノ一滴ハふけヲ去リ抜毛ヲ
止メ不快ナルかゆみヲ治ス

東都唯一外人經營化粧料藥品店
コロンビヤ蓄音機レコード東京代理店

東京市京橋區銀座尾張町
ホスピタル、ファマシー

銀座藥品部

電話銀座一五三五番

The Hospital Pharmacy

FURS & MILLINERY

D. KOMEYA,

Prop. C. YAMAOKA

WHOLESALE and RETAIL

A Largest collection of
Furs, Coats, Stoles,
Muffs, Slippers,
Brocade Linings &
Feathers.
Water Color Pictures.

FUR DEPT.
No. 3 & 4, Benten-dori, Itchome,
Yokohama

PICTURE DEPT.
No. 14, Bentendori, Itchome,
Yokohama

SUMMER BRANCH
Karuizawa, Shinshu

貴婦人令嬢用

毛皮コート 襟卷 マフ スリッパー 羽毛

絹裏地 水彩畫類 其他毛皮製品種々

何れも最新流行形いろ〳〵取揃てありますから多少にかゝわらず御用命の程御願上げます、又た御贈答品としては最も好適品であります、御注文も御好みに依り入念調製いたします。



横濱市辨天通一丁目三、四番地
コメヤ號 山岡商店
電話長三三七〇

東京市京橋區南金六町一番地
コメヤ號 山岡商店
電話銀座一〇二五

夏期出張所 信州輕井澤

一、銀器 貴金屬寶石細工品一切

外國人交際用贈答用品充實完備

內地流行界より一歩づゝ先走つた品物のみ



○意匠、技巧優良
○價格低廉
○信用安全
○取引敏速

永年外國人向にて苦心の點は品物に現はれて居る筈です態々横濱迄御用命の甲斐あると確信致します

横濱市辨天通一丁目拾貳番地

辨天商會

滋養强壯劑

本品は醫學博士佐伯矩先生の創製せる營養劑にして、約五〇%の「グリコゲーン」及蛋白質、脂肪、越幾斯分の適量を含有す。

グリコナール

（適應症）一般虚弱、心臟機能衰弱、結核其他慢性病者等滋養料の充足を要するものに對し、能く其目的を達することを得。（説明書進呈す）

錠劑百錠入各地有名藥舖に有り

殺菌漂白劑

オキシフル（十容量%過酸化水素水）は安全無害の消毒、制臭、漂白劑にして、其消毒力は約千倍の昇汞水に匹敵すと稱せらる。（説明書進呈す）

オキシフル

（純良過酸化水素水）

醫藥として創傷其他の一般外科、耳鼻咽喉科、齒科等に汎用せられ、化粧料として齒牙を美白ならしめ口臭を去る等に推奬さる。

小瓶（四オンス入）大瓶（一ポンド入）の二種あり。（各地有名藥舖に有り）

三共株式會社

本社　東京日本橋區室町三丁目

出張所　大阪淡路町・臺北府後街

事務用品一式
歐米文房具卸小賣
東洋萬年毛筆發賣元
リバテー萬年筆發賣元
各種文房具製造

東京文具株式會社

東京市神田區神保町通リ
電話神田三四七六番
振替東京七一五〇番

クリスマスの祝賀に、年末年頭の記念に、親しき友のために、何を贈呈しよう?? 讀んで面白く、且つ修養上利する所の多い書籍こそは、贈る者、受くる者、何れに取りても、高雅なる趣味を滿す、最良の贈答品であらう!! **興文協會發行の書籍目錄。**

稲垣陽一郎著	宗教的修養書としての詩篇	一、二〇円
津金澗村譯	日々の基督	一、三〇
栗原基譯	靈光錄	一、〇〇
同上	耶蘇の人格	一、〇〇
森田松榮譯	望の曙	一、八〇
野邊地天馬著	つの笛	、二五
安中花子著	爐邊	、六〇
ヴアン、ダイク著 磯部泰治譯	青い花	一、三〇
弘中つち子譯	パレアナ	、七〇
同上	ルイズ	、七〇
伊藤宗輔譯	眞珠姫	一、八〇
同上	命がけ	一、二〇

女聲カンタタ	、三五
クリスマスの歌劇	、〇五
クリスマスの福音(カード)	、一二
小兒の福音	、一五
白き贈物	、一二
貴女の贈物は?	、一〇

クリスマスと新年の主なるキリスト	、〇五
日々の舟路	、六〇
クリスマスのお客	、〇五
クリスマスの演藝	、一五
基督降誕の歌	、六〇
女子合唱讃美頌榮集	、六〇

女子青年界　第十七巻　十二月號　大正九年十二月一日發行

クリスマスの意義

金井為一郎

○

歳末に先立つ旬日、我等は復た此處に世界の最大祝日たる聖誕節を迎ふるの光榮に際會した。

人の子は年々歳々同じ様な恨みを以て其年の終を結ぶのである。年頭の希望、漾々として湧く春潮の如くであるに引き代へて、其末端に立つて回顧すると、落漠たる感に襲はれぬ幾人があるか。而かも之は人生の縮圖であつて、そこに横はつて居る者は、爲し遂げざりし計畫。達し得ざりし理想。解決すべくして失敗せし矛盾。把へんとして却つて失ひし寶望んで滿たなかつた希望等である。かくて人は死、時代は飛び去つた。大なる國は斃れ。最も壯んなつた者は尤も衰ろへた。之ぞ人生の常道であるか、日の出を見た者は又日沒を經驗せねばならぬ様に、我々は盛なる者必ず衰ろへる萬物の理法の中にあつて此世を終らねばならぬのであるか。歳暮れんとして其末端に足を立てざるに先立ち我等は此處に他の界つた音づれを聞くのである。曰く『世々罪と死の纏はれて生くべき望なき人の子の爲に永遠の日は輝き出したのである。暗に住む子等よ喜べ。愚なる者よ學べ。死ぬべき者よ來つて生命を得よ。失望せる者は彼によつて不滅の望を抱け、神は此滅ぶべき人生

に其獨子を與へ給ふたのである」と。之我等が此期節に於て聞く長へに新なる天來の音づれである。

○

「我等は一人の子を與へられたり」與へられた。此時に於て與へられたと云ふ言葉が如何に強い音調を以て響くかをよく其靈の耳に聞かれん事を望む。「神は其生み給へる獨子を世に與ふる程に世を愛し給へり」我等の神は奪ふ神でなくて與へる神だ。與へんとして心を碎き力を盡し給ふ神だ。「神は愛である」とは其御心の深きところにまで入る經驗を得た聖者の言葉である。實に愛は與ふる者である。

永遠の初め、山未だ成り出でず、地も其基を置かれなかつた時、日は輝かず星も其軌道に未だ巡環の初旅を始めなかつた時より神は與ふる愛の神であつた。誰が永久の暗黒な空虚に向つて「光あれ」と語り給ふたか。これ神の賜の初めではないか。天は無限際の彼方にまで廣められ、星宿其所を得。やがて地球が堅き岩殼の上に草木蟲魚を生じ始めた時に、其生命は何處から流れ來り、其力を何によつて與へられたか。此地上に人類の始祖が始めて理性ある動物として立つた時、其不思議な靈能は何處から浮び出て來たか。自然科學と哲學も之を說明し得る者はない。聖書のみ其古き時代の人に語られた驚くべき單純の物語の中に、「神己の息(靈)を之にふき入れ給へり」と說明し盡して居る。此の例と其形式は如何ともあれ此處に與ふる神在まして、生ける人間が地上に活動を始めたのである。

○

以來人間の步みは右にまた左に鷗の沙上を步くにも似て確たる一定の目的を指して進んだのではない其行くべき處も知らずして彷徨ふたにすぎぬけれども、神は人類の間に絕えず導きの手を賜ふて進步の道程に立たせ給ふた事は、人文史の跡を辿る者の明に領き得る處である。遊牧の民の中に初めてアブラハムが生れ、神の命を信じ、基督に從ひ「行くべき所を知らずして出でたり」とあるのは如何に美はし

い事實の説明ではないか。初めてモーセがシナイ山より律法の石碑を携へて下つた時。牧人ダビデが神の靈感によつて「エホバは我が牧者なり……」と歌ひ出した時、何れか之れが神によつて與へられなかつたと云ひ得たか。ギリシャの半島にソクラテースを立たしめた時。プラトーを起こした時。將た又「天徳を我に成す」と叫んだ孔子を周末の戰國に呼び起こした時直接に將た間接に、そこに神の賜物を見出さぬ事はない。ニユートンは微分子の中に宇宙の神秘を覗き込んだ時に、跪いて神を拜し、コロンブスは初めて北米大陸の一端にふれた時に地に伏して神に感謝した。彼等も皆其與へられた賜物である事を知つたからである。斯く神は曾て與へ常に與へ永遠に與へつゝ在まし給ふ。花の色に見よ、鳥の聲にきけ。星の囁に耳を傾けよ、「神は與へ給ふ。常に與へ給ふ。萬物を與へ給ふ」と語つて居るではないか。

〇

斯く神は萬物を常に與へて居給ふにかゝはらず、之を以て滿足し給はなかつた。神は愛であり人間は其愛する子等であつたから神は己を與へ給ふ迄は滿足し給はなかつたのである。昔の豫言者は指し示し律法は其型を敎へ、地上の萬物は其の來るのを待ちのぞんで居たが、罪に汚れた人の子は求むる事を忘るゝに至る迄に亂れ果て荒み果てゝ、己を愛する神の敵となり、強いて滅亡の途を選びつゝあつた時に神は御自身の中なる最愛の者、其の一人子を人類に與へ給ふに至つて、啓示は其頂點に達し愛は天地の間の堰を切つて此の濁世に流れ入り光明の海の如くに氾濫したのである。

基督地上の人とならんとし給ふた時、此世は彼に貸すに一軒の家と、一室、一牀も敢てせず、馬屋は其誕生の家、馬槽は其初床であつて、地上の人は誰も彼に注意を拂はなかつたけれども、天上に於ては比類なきの大事件、尤も大なる神の榮光の顯はれ、全能の神の熱心の業であつた。其夜天使の歌、萬軍の聲は相和して靈界を搖り動かし、ベテレヘムの野

の牧羊者にまでも微かに聞こえて來た程である。實、に之ぞ大なる感動を天界にも地上にも引き起こさずして何が之を爲し得べきか。

○

斯くして彼は地上の人となつた。我々の兄弟、我々の血族、同胞の中に入つた。彼は人類の所有、又富、寶、生命として天の父なる神より我々の爲に、賦與されたのである。其生涯の美はしき德も、滿ち足れる義も、完全なる服從も、信仰も、皆我等罪に死んだ者の爲に贈物として與へられたのである。此處にイエスは時來つて人類の眞中に立ち、我等の罪の爲に泣き、我等の悲しみを負ひ、我等の苦しみを己の者とし、我等の罪の爲に己の生命を與へ給ふた彼が自分に反き逆ふ人々の爲に斷腸の思ひを以て、「母鷄の雛を翼の下に集むる如く我汝の赤子を集めんとせし事幾度ぞや、されど汝等は好まざりき」と嘆かれたのである。

彼は我に來れと招いたけれども、我等は彼を捨てゝ彼を十字架に釘けた。然し彼は其血汐に染むる御手をのべて我等を抱かんとし、我等の罪の矢表に立つて「父よ彼等をゆるし給へ」と祈り給ふたのである。

與へられた者を我等は拒んだ。然し神は我等をなほ拒み給はずして、「日ねもす手をあげて戻り從はざる民に向ひ」給ふたのである。かく彼は我等の爲には父に對する唯一の中保者であり、我等に代る義であり、善である。彼は死にて復た生き、罪を封じ、永久の義しきを此世界に携え入り、己を受くる人の子の爲に惜しみなく分け與ふるのである。彼を受け入れ其名を信じて從ふ者は神の子とせられ、永久に生くるのである。クリスマスの意義は引いては此處にまで及ばねば止まない。人間の破船を救ふべき光は、ベツレヘムより輝き出した星の光より外にない。

○

聖誕節を迎ふるに當り我等が思ふべく爲すべき業

は數多くあるだらうが、先づ此の賜物を世に惜しまで與へ給ひし神の御心の程を考えて、盡きぬ感謝を捧げると共に、尤も大なる事は「彼を受け容れる」事であると思ふ。最大の心づくしなる父の賜物を、其與へんとし給ふ御心の如く受くる事を離れては我等の地上に於て一つの善も義も見出す事は出來ず、神を喜ばす事は不可能である。「信仰なくば神を喜ばす事能はず」人の世の價値ある生存も悉く此處一點から出發するのである。

此處に「受領の大なる業」が始まる、受くる事は容易の如くして、曲り戻った人間にはなか〳〵に難事である。我等が彼を受くるは、主として受るのである。王として受け容れ、我意を捨てゝ從ふのである。又我等の唯一の望、地上の一つの義として彼にたより己をあけわたすのである。其時、彼は其人に自分を與へ永生の世嗣と爲し己の一身同體として神の愛子たる特權を與へ給ふのである。

○

世は移り物は變はり社會の變轉、送迎に暇もない世に於て我等何を爲すべく生れ、何處を指して行くべきか、人生の究極の目的は何か、一言にして簡めあげるならば「神の遣しし者を信ずる」ことであり、彼を受け神に歸ることである。改造も改革も、これを離れては沙上の樓閣である。人は幾千萬度もかゝる業を試みた。今も亦試みつゝある。神は一度而かして永遠な土臺を獨子に於て與へ給ふた。實に「其名は奇妙、また議士、また大能の神、とこしへの父、平和の君」である。

信仰は望む所を疑はず
未だ見ざる所をまことゝする
もの也。—ヘブル書十二章—

英 文 欄

CHRISTMAS 1920

The ther day I saw a dear, smiling, happy baby, so sweet and pure and wonderful that I feared to touch it. It seemed just to have come from God, and to still have the "clouds of glory". Then I went out on the street; it was evening, and in the shadows was crouching an old, wretched-looking woman with her face lined and disfigured by evil and sin. And I thought, "Was this woman once a baby whom everyboby loved?" Then I thought, "Dear God, what will this other dear baby become?"

Do you remember when the old wise men of the East came from far off to follow the star that told them a king had come into the world, that they found only a tiny baby, lying in a cow-stable? Those men left their rich gifts and went away. Henry Van Dyke tells a beautiful story of the "other wise man", who was delayed in starting to see the king, and for years and years sought him, always being delayed because he stopped to help people who needed him, for whom he gave even the gifts he had saved for the king, until he was an old, old man, dying by the roadside, and Jesus came to him and said, "Inasmuch as you have done it unto the least of these, my brethren, you have done it unto me", and he knew it was the King! All the time he really had been following and serving and serving the King, when he was tired and discouraged and yet stopped to help others. He had never said, "What is the use? I will go home and be comfortable." He followed,-followed and gave his life for the King!

How silently, how silently,
The wondrous gift is given!
So God imparts to human hearts
The blessings of his heaven.
No ear may hear his coming,
But in this world of sin,
Where meek hearts will receive him still
The dear Christ enters in.

Quietly, quietly that little baby came inte the world and grew up, but now in the hearts and lives of his friends he walks throughout the world. Quietly, quietly he enters our hearts and "walks beside us all the way", when we will allow him. Perhaps we have only begun to follow Christ, "babes" Paul would call us. But gradually, surely we are growing into "the measure of the stature of the fulness of Christ", if we are trying to grow, grow in all the fine things of life, that that little old woman in the street missed.

When we seek to give birthday gifts to those whom we love, we search hard to find out what it is that the person would like most. And sometimes, even if it costs more than we thought it would, we get it and give it.

This is the birthday of our Master, whom we know wants more than anything else that we shall try to be like Him. "Follow!" He calls, and our gift is, "We follow, no matter what it costs".

What can I give him,
Poor as I am?
If I were a shepherd
I would bring a lamb,
If I were a wise man
I would do my part,
Yet what can I give him?
—Give my heart!

ピリピ書講解（六）

佐波亘

□人が此世に產み出されるのは決して偶然でない。人生は無意義でない。たとひ人はこれを自覺しないでも、產み出した者、遣した者の方には必ず目的があると云ふのが基督教の人生觀です。本書二の十二――十八は斯くの如き立脚地からパウロがピリピ教會の人々に日常如何に生活すべきかを教へ且つ勸めて居るのです。若しも私共の取るに足らぬこの小やかなる生活にも、神の大なる御計畫があるといふことを自覺することが出來たなら、私共の生活はどれくらゐ緊張し且つ興味が湧くことでせうか。

□前回に講解した所は基督教の神秘的な方面でしたが、こゝは其實際的な方面です。即ち諸君はすでに以上のやうな……神の子が十字架に懸けられて死んだといふ――神秘的な信仰を抱いて居らるゝが故に……………と說き出でたのです。十三、

□かくてパウロが說かんとする所は、神は基督の御生涯にあのやうに――殆ど信じ難いやうな――大なる計畫を立てゝ居られたが、これと同樣に諸君の一生にも亦測り知ることの出來ない程大なる計畫を立てゝ居られるといふ點です。又それ故諸君の生活も「キリスト・イエスの心」（五）を心として、あの御方のやうな一生を送らなければならないと言つて居るのです。

□それには第一に聖旨に「服從」（十二）する事が大切です。基督は實に「死に至る迄、十字架の死に至る

迄順ひ給へり」(八)とあります。抑々信は力なりで昔から信仰によつて偉大なる超人的な生涯と事業を遺した人は澤山にあるではありませんか。そして其人々は皆自我を棄てゝ只管聖旨に服從したのではありますまいか。信仰といふは要するにこの意味の服從です。それは又天意に從ふことです。さらにこれを基督教的にいふならば、私共が基督の御一生に模倣ひ、基督の御約束を信じて、基督が仰せられたやうに生活することに外なりません。

□然も其服從は只折々の發作的なものであつてはなりませぬ。行住座臥常に服從の態度をもて生活しなければなりませぬ。特にそれは人前や目先の服從でなく、常に見えざる神の御前にあるの思ひをもてする服從でなくてはなりませぬ。それは常に深く且靜かに神の見給ふ己が靈魂の姿が如何にあるかを考へるのでなくてはなりませぬ。(十二)そしてこれは良心の私語、或は良心の命令に服從する者のみよく實行する事が可能るのであつて、私共はとかく自我の生活をつゞけ勝ちなものです。

□「畏れ戰きて己が救を全うせよ」(十二) ペテロ後書一ノ十には「ますます勵みて汝等の召されたることと選ばれたることを堅くせよ」とあります。信仰生活といふのは「己が救」のためである事を忘れてはなりません。そしてこれがためには靈性上の事項に就て神經質に心配して生活しなければなりません。私共は無益な事項に關してあまりに神經質であり、且あまりに心配し過ぎるにも拘らず、靈性上の問題に對しては如何ですか。今年は彼のピユーリタンの三百年記念祭に相當しますが、彼らの生活こそは實に畏れ戰きて己が救を全うしたものでありました。またパウロを御覧なさい。彼は「わが體を打擲きて之を服從せしむ」(コリント前書九ノ二十七)とさへ告白して居ます。あゝ盛んなるかな。それに引換へ私共の微温い信仰生活よ。我ながら愛惜がつきて口より吐出したき心地ぞする。私共は日毎夜毎繰返し繰り返し空な生活を送つてしまつて、そこには何らの力を感ず

ることもなく、感激は起らず、希望の輝を認むる事も出來ず、幸福なく平和もない、極めて不徹底な且つ淺薄な日暮をして居りはしますまいか。要するに之は私共の生活に畏れ戰きて己が救を全うするといふ態度がないからです。信仰生活は實に戰々競々として薄氷を履む生活であらねばなりません。其はもつと嚴肅なものでなくてはなりません。殊に世態人情がすべて浮調子に傾いて居る現代に處しては です。

□己が靈性上の事項について神經質に心配して生活するといつても、それは唯私共が獨りぼつち獨力で努力奮闘するのではありません。「神は御意を成んために汝らの衷に働き、汝らをして志望をたて、業を行はしめ給へばなり」(十三)とあります。言ひ換へれば「我らは神の中に生き、動きまた在るなり」(使徒行傳十七ノ二八)でありますから、結局私共が聖旨のある所を自覺して、熱心にこれに應ずるやうにする丈けの事です。たとへば私共が一生懸命に櫓を漕いで自己の乘つてる船を進めると同時に、吹き來る風に帆を孕ませて進んでゆくやうにする事です。即ち物理世界に於て自然力が不思議な作用をするやうに、靈界に於ては基督の約束せられたる聖靈の力が活動ます。そこで私共が聖靈に指導るゝまゝに生活するやうに努めるならば、自然それが己が救を全うする事になるのです。

□人生に於る聖靈の力は實に神の恩寵の秘義です。全く神秘です。この罪に汚れたる人が己を救はんが爲に、基督をして十字架の死をさへ遂げさせ給ふた天父の恩寵に感激する場合に、事實其人の心に活動きかける道德的の神秘な力、即ちこれあるに依つて人は己が救を全うする事が出來るのです。私共は自己に對して如何に不信任でも神を信任する事は可能ませう。其れ許りではありません。「御靈も我らの弱を助けたまふ」(ロマ書八ノ二六)とあるではありませんか。

□人に靈性のある事、聖靈の助けのある事、之は私共の日常生活に於て親しく經驗し得らるゝ事實です

そして此經驗は私共の心に希望と歡喜を與へます。此點はロマ書七章から八章へと讀んで行くうちに、私共が非常に強く感ぜさせられるところです。

□私共は神と聯盟して居るのです。神と同勞者なのです。そして基督は『信仰の導師また之を全うする者』(ヘブル書十二ノ二)です。それ故神を信じ基督に縋り乍ら己が靈魂の姿を省みつゝ、畏れ戰いて生活するならば、必ず己が救を全うする事が可能るのです。

□古へイスラエル人は、神の人モーセの指導に對して疑を抱き、神に向つて呟きました。(出挨及記十六ノ七、及民數記十六ノ五、十)されど『怨言て滅す者に滅ぼされ』(コリント前書十ノ十)ざる爲、こゝにパウロは『なんぢら呟かず、疑はずして凡ての事を行へ』(十四)と言つたのです。一寸考へて見ても理會るやうに、兵卒は大將が命ずるまゝを行ふの外はなく、上よりの命令に對して何故といふ反問は許されますまい。信仰生活に於ても『Why』は禁物です。基督の祈禱に見ても『御意のまゝに爲し給へ』(マタイ傳廿ノ三九)とあるではありませんか。其れはとにかく此小い人がどうして大なる神の心を知り盡す事が出來ませう。唯信じて立つの外はありますまい。

□申命記三二ノ五に『彼ら(イスラエル人)はエホバに向ひて惡き事を行ふ者にてその子にはあらず。只これが玷となるのみ……』とあります。神の子たる基督者は『此曲れる邪惡なる時代に在りて神の瑕なき子とならん爲』(十五)、天父の名を辱かしめぬやうに生活せねばなりますまい。

□『生命の言を保つ』(十五)者は、宗教、道德全て暗黒なる時代に於る燈明臺に比する事が出來ませう。それから『汝らは………此時代に輝く』(十五)とあります。基督者は斯あらねばならぬ事勿論です教會はもとより、苟も主の名に於てする事業は申すに及ばず、基督者の家庭も亦すべて『此時代に輝く』ものであらねばなりますまい。(ヨハネ傳八ノ十二、マタイ傳五ノ十四)

□こゝに『キリストの日に我誇ることを得ん』(十六)とありますが、之は他の文章に『主の日』とあるの

と同じ事です。審判の日の事です。こゝを讀むとパウロは傳道の爲大いなる疲勞を感じて居るらしく察せられます。實際此世に於て傳道の事業程心身を消勞させるものは外にありますまい。併しながらそれもこれも審判の日になつて回想するならば彼は主の前に些さか誇を感ずる事であらうと云つて居るのです。彼は斯くの如くにして常に自ら慰むる所があつたのです。否如何なる疲勞と苦痛と心配の中にも、そこには常に大なる歡喜があつたのです。私共は此世に於て人の前に誇る事は止めて、どうか審判の日にキリストの前に誇を感ずるやうな生活をしたいものです。斯くの如くにするならば私共の生活はよほど聖化されるでせう。

□「我が血を灌ぐとも我は喜ばん」（十七）。これは犧牲の喜びです。世に何者の歡喜か犧牲の歡喜に勝る者がありませうか。デビド・リヴヰングストーンが亞弗利加の爲になしたる犧牲の歡喜の如き大なるものは別としても、私共日常の平凡な生活の間に於てさへ、主の名に於てなしたる犧牲の生活は、私共の心に微笑を禁ずる事は出來ません。あゝ犧牲の後の心ゆく祈りよ。すべての歡樂は皆夢の如くに消え失せても、うれしきは犧牲の歡喜よ。想出は熱き感謝の涙となつて双頰に流るゝではありませんか。

□「汝らも喜べ、我と共に喜べ」（十八）喜びといふものは衆と倶にせまほしく覺ゆるものです。（ルカ傳十五ノ六、九）それが自然です。パウロは主の爲に傳道上實に盛なる喜びを感じて居たものと見えます。思ふに彼の偉大なる勢力は斯の如き大歡喜から迸り出でたるものではなかつたでせうか。省みて私共は如何ですか。

なんぢ夜も晝も河のごとく涙をながせ、みづから安んずる事をせず、汝の瞳を休むること勿れ、汝夜の初更に起いでゝ呼びさけべ、主の御前に汝の心を水のごとく灌げ。

—エレミア哀歌二章—

シング

森田松榮

先頃讀んだ雜誌の中に、ある文學者の朝鮮旅行記が載つてゐた。彼は朝鮮の美術を通して、朝鮮に深い愛を有つやうになり、遂に音樂家なるその夫人と一緒に今年朝鮮に旅行をした。官憲の壓迫は、屢々政治軍事の聊の關係もない此文學者をして朝鮮人に、彼の至純な友情を卒直に披瀝することさへ妨げやうとしたこともあつた。然し、それにも拘らず彼は確にその旅行の目的を遂した。又彼に共鳴する日本人は公然陰然彼のその擧を自分の事のやうに喜び又は感謝してゐる。心と心の結合ほど強いものはない。所謂「愛國者」は不審に思ふかも知れない。然し、國や家の關係は相對である。心靈の關係は絶對である。イエスの生涯によるもこれは明らかである。掠奪、壓迫、慘虐、專政。それは敵によつてされやうと、同郷同國の人によつてされやうと邪惡たる點に於ては一つであり、我々がそれらを行ふものに對して發する憤怒も變る筈がない。惡逆不道を見て、その下手人を思はない憎まない者のないと同樣、私達は何所のものにもあれ私達の心を牽きつけてやまない美術を、文學を、それらを產み出した人々を、その理想を、感情を、全然思はずに私達はそれを觀賞し得やうか？　天上の星を見ては更にその上にある至大者をしのび、自然の美を眺めてはその後にある絶美者をおもひ、路傍の一木一草にも、生命の妙趣、創造の幽玄さを感じる。善にもせよ。惡にもせよ、我らは外面の事實からその人格的發動者へと進んでいつて、そこに友なり敵なりを見出さうとするものである。

世界の所謂强國等がその壓迫する國々に對して、政治上教育上、どの方面にも進歩發展のあらゆる道をふさいでおいて、どんなにその民を劣等呼はりをしても、燦然として人文史上に輝く彼等の功績を否定することも、彼等の藝術が多くの胸に深くやきつけた愛と感銘とを除くことも出來ない。

かういふ例は到る所にある。

「その時位いポオランド人がロシアに多くの同情者を得たことは嘗てなかつた。革命黨は勿論の事である。然しロシア社會の最も穩健な分子の間ですらもポオランドを怨みの深い從屬者とするよりも、親善な隣人とする方がロシアとしては遙に得策だといふ考を持ち、又公然さう唱へてゐた。ポオランドはその民族的性質を到底失はれないであらう。それは既に餘りに強く發達してゐる。ポオランドは今それ自身の文學、それ自身の美術工藝を持つてゐる。將來とても同じことであらう。ロシアはたゞ權力と壓迫とによつてポオランドを隷屬關係に保ち得るに過ぎない。そしてこの狀勢は、從來ロシア自身の國
於ける壓迫を助長して來たのであるが、將來に於
矢張りきつとさうである。平和なスラブ主義者
も矢張りこの意見をもつてゐた。（これは『革命家の
の和譯から轉載しました。この書は今迄日本で出版された録
內容、譯文ともに最上のもの〻一つで必讀の書であります。）

もう一つの顯著な例は、英國對印度である。

大戰中、ある英國宣教使が、日本政府が朝鮮人
する態度を更めなくてはいけないと話した時、
心の中で「それには文句はないけれど、他人の
を云ふ英人自身もお互様に印度人に對する態度
めたらどうだ」と思はずにはゐられなかつた。
人は朝鮮人には中等教育もろくすつぽさせない
しておくのに、印度では女子大學まで建てゝゐる
いふ、たしかに先方のやり方は優れてはゐる、
五十歩百歩で、米人と印度人とは政治上其他に
な差違が附せられてゐる。近く英政府が印度の
タゴールの獨逸入國を禁止したなどは、殊にタ

ルから深い感銘を受けてゐる丈に我らは憤慨に堪えない。現代印度にイエスが生れても同じ壓迫を受けることであらう。

「筆の力は劍にまさる」日本は武力では露に勝つたが、見よ新日本の思想——靑年男女の心を風靡してゐるのは、トルストイ、クロポトキン等ではないか？　と誰かゞ云つた。大きな兵力と大きな監獄と大きな金力と大きな軍艦とを有つてゐるものが世界の最强國のやうに思はれてゐるのに、獨立を失つた朝鮮留學生の一擧一動は、なぜ大日本の官吏が幾人もかゝつて、それを見張らなければならない程恐れられて居るのか？　獨立を失つた印度の一詩人タゴールの旅行は、大英國官憲がなぜ海の彼方まで命令を發して騒がなければならない程恐れられてゐるのか？　獨立を失つてゐたユダヤのイエスを、世界最大最强のローマがどんなに恐れてゐたかを知る人には説明の要はない。

この不愉快な壓迫の諸例を書いて來た後で、又如何なる暴虐な權力も心靈の自由と正義とを滅ぼす事の不可能さを知つた後で、シング師のことを書くのは誠に愉快である。

英國が印度を全く掠奪して、其王が印度皇帝の稱號を他の稱號と共にうけて愛國的な坊さんから受膏されてゐる間に、キリスト自身が遣し給ふたこのシングは、あらゆる人種の區別なく、萬人の王たるキリストの使徒として、人を治めん爲ならず、仕へん爲に來給ふたキリスト・イエスを、さながらに具顯せん生活をしてゐる。彼こそは實に「キリストの活ける模倣」とでも呼んだらいゝかと思ふ。

彼は印度の豪族に生れた。少時より人生問題に心を潜め、その解決を宗教や哲學に求めて得ず、遂に煩悶の末、自殺を決心するに至つた。

親や兄弟の暖かい愛に育まれ抱かれてゐた彼、高い門地と巨萬の富とが安樂な生活を保證してゐた彼は、心靈的には自分ほどの不幸者はなく感じた。傳統や禮儀からはとつくに離れてゐた。讀むもの學ぶ

ものゝどれも、彼の不可解をとくものはなかつた。彼は聖書にさへも求めるものを得なかつた。いはゞしつかり踏みしめてゐた大地がぐら〳〵搖れてあとかたも崩れて了つたやうなたよりなさ、暗さ、わびしさ！　こんな時に一切の終了である神秘な死をなつかしく思はないものがあらうか？

然し奇しきは神の攝理、妙なるは神の途である。ダマスコ途上のパウロの經驗が、死を決して道を求めたシングにも與へられた。彼は自決せんとした瞬間活けるキリスト（人は幻とよぶだらう）を見た。昨日聖書を火に投じた彼は今日既に基督の忠僕であつた。此時彼はまだ二十歳にならぬ少年であつた。

彼は家をすて、富を棄て、一定の宿なく、村から村、町から町を傳道して歩いて、人々から與へられるまゝに、眠る所と食とを受けてゐた。

印度人は自己の宗教に熱心なだけ、それ丈キリスト教に反對する事も强い。彼は說教中砂で目つぶしをされたり、顏を毆打されたり、親類のものから與へられた毒藥入りの食物を知らないで食し、嘔吐の爲に辛ふく一命をとりとめたこともあつた。投獄、追放の迫害にも逢つた。一度などは迫害されて數地の洞窟に夜を過し、朝ふと見ると、自分の傍に豹が眠つてゐたこともあれば、又、人住まぬ朽小屋に眠つて醒めた朝、自分の衣の端に毒蛇がトグロをまいてゐたこともあつた。

彼は斯の如き生活を今日迄十六年間續けてゐる。今は名聲印度の内外に隱れなく、傳記も出てゐるし彼が說教する場合には、萬餘の人々の集ることもあるといふが、彼はあらはれゝば顯はれるほど、身を隱すに急であつて、自分の履歷、生活等も特に他から問はれなければ自分からは話し出すことはない。彼の說教はイエスのそれの如く、比喩――實に適切な――に滿ちてゐる。又、自然にして自由、獨創的にして淸新、單純なること、將に彼自身とその生活とのごとくである。

彼は罪惡や暗黑よりも、好んで神の愛を多く語る

彼の說教から得る印象は、現世の邪惡と不義よりも寧ろ、神の偉大なる愛と、基督的生活のいみじき平安とである。

靜安と活氣とは彼の中に不思議な程よく調和して居る。彼は小兒もなつく柔和な相の中に凛然たる威厳を具へてゐる。彼の朗々たる音聲と自由な身振りとは、我々に淺薄な興奮を起させる事は全くなしに却て神の無言の深い愛に我等を導き、盡きない感激に浸すのである。

私にとつて、この世をさしもに現實なものとしたのは、あの本郷の八角講堂で詩人タゴールの口から

"Life itself is aspiration"

の語が、此耳と心とに徹した時であつた。我等の望む心靈の故郷をさしもに現實としたのはシング師の

"How ashamed we shall be when we meet in the presence of God, and before the saints and martyrs, if we do not live real Christian lives here"

が私の心靈に響いた時であつた。これは何も新しい語ではないが、キリスト・イエスの為、孤獨、饑、寒、病、追放、投獄、毒害をも經驗したシング自身の唇から洩れた時には一語千鈞の重みがあつた。

昨年彼が宣教使等の懇請により支那から日本に來た時、私は四度彼の說教をきく幸を得た。彼は本年數へて三十三歲（といへばイエスの死なれた歲）である。今迄に見たどのイエスの肖像畫よりも、彼はイエスらしく私には思はれた。彼の精神、彼の信仰彼の生活がイエスに近からの結果でもあらう、否、それよりも彼に宿つてゐる聖靈が彼のすべてをキリストに近く化しつゝあるからではなからうか。今、彼は教會にも傳道會社にも屬してゐない。

彼自身の語るのをきかう。

「我らは微小なもの、地球の引力は强大なものである。然るに、もし我らが小さなものでも、自己の掌中に握るならば、地球の强大な引力も、これを掌中

から奪ひとる事は出來ない。同じく我らもキリストの掌中にある時は、落ちる事がない。安全である」

「誘惑は礙く石であるが、信仰ある者には天國への飛び石である。一つ〳〵を踏み越ゆるごとに天國に近くなつていく」

「卵の中にゐる雛兒は自分丈の小さな世界に住んでゐる。絶えず母鷄の暖かみと保護とを受けてゐるのではあるが、母鷄を見ることも知ることも出來ないでゐる。翼もあるけれどしつかりたゝまれてゐて使ふことが出來ぬ。神の光の中に來ない時の我らは卵の中の雛兒である」

「十字架は神の國の鍵たある」

「キリストは『汝らは地の鹽なり』と仰つしやつた一塊の鹽をとつて飯の中に入れる、鹽の形はなくなる。然し消滅ではない。味つけられた米の一粒〳〵の中に鹽は生きてゐるのである。鹽が塊のまゝである事は何の役にも立たない。基督者もさうである」

「『汝らは世の光なり』光を輝かせる爲にはランプのシンは喜んで燃えて、自己を棄てなければならない。シンは油と光との中間にある。いくら油があつてもシンが燃えやうとしなければ光はない。同樣に我等クリスチャンは進んで犧牲となる心構へが大切である。」

「『宗教はどれでもみんな同じだ。みんな善行を致へる』といふ人達が澤山ある。が、非常な相違がある。他の宗教は『出來る丈の善行を爲せ、然ば汝は遂に善とならん』と云ふ。キリスト教は『善なれ、さらば汝は善をなし得ん』といふ――善行は善心から自然に出る。心の變化が第一に來なければならない。

「祈禱は神との交通である。貰ふ、願ふのほかに餘念のない祈禱をするものは、乞食のたぐひである。父子相會する時は、無言なりと雖、心意相通ずるの喜びがある。我等の祈禱もさうありたい。祈禱は天父との交りである」

「ある所に羊を澤山もつてる人がありました。朝數人の羊飼人に分擔させて野にやり、夜は羊飼人がつれて歸る自分の羊を受け取つてゐました。或時、羊が數頭歸つて來ませんでした。それで羊飼人に『數が足らないから捜して來て下さい』と云ひました。彼らは『私達は、晝間傭はれた丈の役目は果したんです。何所に迷つてつたか途中ではぐれた羊なんかこの暗い夜にあてなしに捜しあるくわけにはいきません』といつて去つて了ひました。

そこで持主は自分が行く事にしましたが、迷つてゐる羊達が、知らない人間と思つて怖ぢてはいけないと思つて、羊の皮を被つて、羊の眞似をして夜道を辿り〳〵迷つた羊をたづね出したといふ事です。この通りに人間には目に見えない神の愛も心も分りませんから、キリストは人間の姿になつて、我々の中に來て、神はどんな方か、どんなに我々を愛して下さるかといふことを敎示して下さつたのです。」

附言。 昨年英人ミス・ボサンケットからシング師の印象を書くやうにといはれて、幾分書いた事があつた。同女史が「ジャパンエヷンジエリスト」にシング師の事をかいた中に、友人二三の文と共に私の文も載つた。其後印度のキリスト敎興文協會から「シング」といふ書物が某英夫人の著で出た（同書にはジャパン・エヷンジエリスト」に出た我等の文が自由に引照してある）同書は我國某牧師が譯する筈になつてゐるといふことで、私は一日も早くシング師の事實と敎訓とを記した詳しい傳記の出ることを望んでゐる。

ピルクリムファザース

古田弟三郎

世界の歴史は何時でも人間の意識界と無意識界とを調和して發展して行く樣に思はれる。我々基督教徒にとりては、其處に神の攝理と人の信仰とが一致して、日一日と神の國が顯現しつゝあるのを知るのである。

若し米大陸がコロムバス及び其他の人々に依つて發見された當時盛んに英人が移住したと假定すればニューイングランドの地方は昔乍らの英國の制度が頑として拔くべからざるローマンカソリックの有勢なる感化の下に植えつけられて居たに相違ない。若又エリザベス王朝の時代に移住が行はれたとすれば夫等移住民は純なる宗教的の動機といふよりも寧ろ策略多き女王の獨斷なる政治の壓迫より免れんとして渡航したであらう。是に比較すればピルグリム祖先の渡航の動機は純然たる宗教的自由の爲の躍動であり、ニューイングランドの未耕不伐の原野森林は此人間の一新紀元の爲に神の備へ給ふたエデンに外ならなかつた。一方より見れば彼等は哀れむべき宗教的流鼠の身である。然し彼等自身は高踏的なる英國新教徒であり其薄運に試練されたる信仰と品性、啓蒙の眞最中に育つたる其教養は將來人道の根本義なる自由平等公共の大精神の下に、根强き一政治團體たるに格好の人々であつた。

一六二〇年九月六日プレマウス港の沖合に漂ふメーフラワーの甲板上にて祖國に對し永遠の袂別をなした百一名の信仰の勇者は、漸くにして百八十噸を支ふに足る木造の船底に全生命を託して六十三日に渉る長時日を怒濤逆捲く大西洋上に漂つた。試みに

思はれよ八十噸といへば漸く隅田川河口に繋留さるゝ帆船の大いさにすぎない事を。

船は北カロライナ州の沿岸を走つて居つた。不運と云ふべきか幸運と云ふべきか暴風到來此處に全く進路を失つて廣大なるチエサピークの灣内に吹き込まされたのである。彼等は私かにハドソン川の河口を殖民の目的として居つたに係はらず、今は全く方向を失つて最も不毛荒凉たるマサチユセツトの一部分に漂着せんとして居る。時は十一月九日、一行はケープコツドの灣内に碇泊する事となつた。彼等の眼前には今や新天地が横はつて居る。日月星辰は歐洲の人地の獨專物には非ずして、暴風治まれば此處にも又太陽は輝き夕到れば永遠の星は閃き月は夜陰を守るのを見た。故郷を去つた彼等は今又故郷を迎へんとして居る、前者の大厦高樓の櫛比せるに反して此處は迎ふるに人なく住むに家なく耕するに田畑なき無人の境である、けれども此處に彼等の贏えたる自由と云ふ富があつた。人道の開放と信仰の自由とを實現する秋は將に到來したのである。上陸に先達つて彼等一同はメーフラワーの甲板に會し個人の自由と安寧の爲に此處に一政治團體を組織し其律法制度に服從順應すべき事を誓約した。是は實に一六二〇年十一月十一日の事である。左に其宣言書を譯出して見よう。

「神の御名に依り此處に署名せるジエームス國王陛下の忠實なる臣民は、神の榮光と基督教信仰の發展の爲且つは君國の譽の爲ヴアージニアの北方に第一回の殖民をなさむが爲航海を企てたり。彼等は今神の台前及び相互の面前に於て壯重なる思を以て一政治團體として團結するを誓ふものなり。夫はより完全なる秩序を保ち一層の安寧を謀りて上述の目的を進歩せしめん爲に外ならず。此故に終始殖民の公善と便益たるべき公平正義なる律法、法令、決議、制度、官制を立案制定施行す。是等に對し我等は正當なる服從と順應を誓ふものなり。」

合計四十一家族百一名の個人は悉く是に署名し此

月純然たる一民主政體は誕生した。人道と個人の自由が始めて權利となつて現はれた。中世の制度は封土と封侯の保全の爲であつたがメーフラワーの一船室に起草され甲板上に於て署名されたものは飽くまで個人の自由の爲の制度であり律法であつた。其日ジョンカーバー氏知事として推擧せられた。

南方に移住する者すら冬季に向ふ季節は忌む處であるにも拘らず彼等ピルグリメージの到着は將に冬に入らむとせる時であつた。樹々の葉は悉く落ちて野原の草は枯れ果て寒風は骨にしむ。東は空漠たる大洋、西は荒涼たる大陸。上陸せんとすれば淺瀨にして船は動かず徒歩すれば酷寒肌を壞して肺病肺炎の原因となる。何人も彼等を迎へいたはる者なく死のみ一人彼等に接近せんとして居る。

十一月十三日、寒氣ますく加はり糧食漸次に缺乏今は只何處を殖民地とすべきかゞ問題である。沿海を航して視察しようとしたが連日の暴風の爲船底破れて修理せざれば再航が出來なくなつて居る。此日陸行隊を組織して探檢に出かける事となつた。ホ
腦はスタンデイッシュとブラットフォードの二氏で
あつた。行くに道なくたよるに地圖なき山谷、しか
も膝を没する雪をかき分けて行く危險に對しては批
探檢は贊成されたといふより寧ろ許可されたのであ
ると誌されて居る。同日傳馬船を持つて一隊を組織
したが其内數名は日夜の吹雪の爲遂に凍死して了つ
た。上陸の一隊は極度迄の疲勞に至つたが一堆の玉
蜀黍と印度人の墓場とを發見して、程遠からぬ地に
耕作地ある事を豫想して歸つた。

十二月六日、最後の小船探檢隊を組織した、カー
バー、ブラッドフォード、ウインスロー、スタンデ
イッシュ其他及び十人の船員を從ふ。寒氣は益々凜
烈水沫は飛んで凍結し人々の衣服は玻璃製の樣にな
つて了つた。萬難を排して進み遂にケープコッド灣
の最も奥まれるビリングスゲードに到達した。夜
を濱に露營して明くれば七日一行は二隊に別れは
陸一は海をと同一方向に進み夕刻海岸の一地點に出

逢ふ事となつた。山間や谿流に多少印度人の荒廢した家屋や墓場を發見し出したが遂に其日も何等耕作に適する原野を發見する事は出來なかつた。

十二月八日、午後五時起床、星光に照されつゝ祈禱會を開く。終ればほの〴〵と東天の白むを見る。突然土人の矢飛來し始む。一同船に乘じて其場を免れ十八里進む、午後に至つて雨まじりの吹雪來り襲波は舷を洗ひそむ、刻一刻と高浪船を弄びそめ、遂に舵機を破損し、止むをえず櫓を手漕ぎにして舟を操る、風ます〳〵烈しく櫓は三つに折斷せられ此處に船は全然自由を失ひて潮流のまに〳〵吹き流さる暗に乘じて船は計らず一岩石に衝き當つた、之を機として乘員は陸に躍降り船を繫留して千辛萬苦の末終に岸に焚火をなし暖をとつた。一夜は疲勞の爲に各々石を枕に砂の褥、焚火のそばに聖い夢を結んだ。

十二月九日、曙光に目覺めて見れば宿つたのは一港灣の入口にある小島であつた事が知れた。身體は今日一日の休養を要するけれども時はいやが上にも尊い。季節は刻々と進み友は疑惑の中に悶えて居るしかも明日は安息日であつた。

十日、安息日、神が眞實に彼等の爲に備へ給ひし地に於て彼等はいとも聖く嚴肅に祈りと聖談の一日を過した。

十一日、月曜、千古に記念すべき日は到達した。探檢隊は遂にプリマウスに上陸した、彼等が其尊き足跡を印した岩の二つ一つは今日彼等の後裔が溢るゝ感謝の思を以て記憶に止めて居る。此日こそニユーイングランドの紀元であり、其若苗の植付けであつた。

十五日、檢すれば殖民地として如何にも恰好の地勢である、此日本船メイフラワーは此處に廻航され彼等が最後に故鄉を訪れた折歡待してくれた英國の港を偲ばんが爲に其名プリマスを取つて彼等の新天地の名前とした。メーフラワー乘員の上陸は實に一理想國の實現であつた。個人の自由の爲の政府、一切の羈絆より脫して神人の完全なる交通を目的とす

る教會の實現であつた。

一六二〇年のクリスマス、記者は手許にある材料を以てしては彼等が如何にして此記念すべき日を送迎したか知るよしもない、然し以前と以後との記錄を見れば其狀態が彷彿されない事もない、明けて一六二一年一月に入りて後嚴寒中に處する彼等の狀態を敍して一先づ筆を措くことにしよう。

一月九日、營養の不足と防寒の不備と馴れざる水上生活と乾燥しきつた空氣（空氣中の水分は凍る爲に）とは、肺を損じて大半の人士は結核と肺炎に侵され、倒るゝ者陸續として現はれた。傳染豫防と危急の爲に衆議一決して一人一戶の家をプリマスの平原に建造する事となつた、然し日を續いで吹雪は來襲し堆雪は益々深くなるのみである。病人を看れば未完成の家は倒壞し家を建てんとすれば人は凍死するのである。寒氣の進むにつれて病人は益々增加した、到る處の未完成の家に看とる者なき病人或は最早召されし遺骸が冷やかに橫はつて居るのである。其內知事カーバー氏は妻と令息親子三名共前後して召された。いたはるに道なき時は葬るにも亦詮なき時である。一行の中僅々七名を除いて他は悉く冷やかなる病床に生死の境を往行したといふ悲慘極る日のありし事を我々は記憶せねばならぬ。

三月三日、春風到來、一鳥梢に鳴く、生き殘りし聖徒は雪中に膝を屈して涙乍らに熱き感謝の祈りを捧げた。生き殘りたいと云ふ事、之が滿腔の祈願であつた、今生き殘つたといふ事之が無限の感謝であつた。語らむが爲、働かむが爲、逝きにし者の心を成就せんが爲、彼等は中心より生き殘りたかつたのである。其後の歷史的描寫は讀者諸君の想像に委せて置く。只生きるといふことは決して容易でないといふ事をお互に考へたいと思ふ。「一事物に時を與へよ若し夫が成功すればそは將に正しきことである」と云ふカーライルの言を想起して戴きたい。直觀の中に基督の神聖を認識しうる力を與へられた我々人間は、生きずんば神に對する反逆であり同時に滅亡である。ピルグリムフアザースを學んで吾々は無人島に移住する必要はない、社會は荒涼たる未耕の大陸である。饑餓と寒さに私共の肉體を惱ましむる必要はないかも知れぬ、然し今少しく私共の靈が饑え凍えて居る事を感知する必要はあるまいか。

トラピスト修道院の晩鐘（上）

住谷悅

求めよ然らば與へられ尋ねよ然らばあひ門を叩けよ然らば開かるゝことを得ん。蓋はすべて求むる者はえ尋る者はあひ門を叩くものは開かる可ればなり。（馬太傳七章七―八）

潮の香の仄かに薫る津輕の海に臨んだ修道院の廣い庭に立ち並ぶ丈高いポプラの木立の下に佇んだ私は、空を彩り山を染めて靜かに沈みゆく夕日を眺めつゝ、夢のやうな思ひに耽るのが常であつた。

今し高い鐘樓からは夕べの鐘の音が漏れて來る。其音の一つは野より丘へ、丘より林へ、林を拔けて更らに山深く谷間へ反響してゆく。他の響は廣い牧場に群る羊や牛の群の上を越えて、海邊の岩に花と散り玉と碎くる波の音と交つて蒼い津輕の海へ溶け込んでゆく。

山から、林の中から、牧場から、默々とした一日の勞働を終つた修道士達は鍔廣の麥藁帽を被り、褐色の寬衣を着け、木履をはいて或は鎌を手にし、或は鋤を肩にして、髮の毛の純白な老た外國人に伴れられてぞろ〳〵と修道院の高い建物を目指して歸つてくる。暮れゆく海の上を滑つて歸る白帆と、一團をなして歸る修道士達の淋しげな姿と、神秘的な修道院の高い建物とに流るゝ夕日は赤くそして穩かである。

英國の"The Pre-Raphaelite Brotherhood"の一人として有名な畫家の John Everett Millais の描いた The Vale of Rest といふ名畫をみたり、Antonio Fogazzaro の The Saint Mosaie と云ふ小説を讀んだりした時、空想的な私の心は如何なにか修道院といふものに憧憬れたことであつたらう。不思議な世界

を慕ふ心、靜寂に浸りたい心は、一日なりとも修道院の敬虔な靜寂な生活を望んで止まなかつた。私は自分が修道院に旅して來て茲に幾日か滯在してゐる事を今更驚異を以て顧みぬ譯にはゐかなかつた。

比羅夫丸と云ふ汽船で函館の港に着いた時のこと函館から六里の山路を海づたひにトボ〳〵辿つてきたこと、落葉松の林の間に始めて修道院の赤煉瓦の建物を眺めた時の心おどり、修道院の白い扉の前に立つてタルシスと云ふ和蘭人の修道士と逢つた時のこと等が、丁度古い錦繪の繪卷物でも繰り擴げる樣にそれからそれへと胸に鮮かに浮び上つてくる。

親切なタルシス老修道士は私を快く迎へて、修道院の中を隅なく案内して種々と説明して下された。

耽美的情緒に充ちた私の心は、物語りを讀む少年の樣に異樣な戰きを覺えつゝ、老修道士の言葉に耳を傾けるのであつた。

・　・　・　・　・

タルシス老修士の語る所に依れば、只今この修道院には老た外國人の修士十七八名、日本人は約三十名居るさうである。修道士達の一日の日課は、通常は朝の四時、祝日祭日或は日曜日には一時若くは一時半から禮拜が初められ、六時迄續けざまに祈禱と讃美を捧げるのださうである。

東の空に棚引く雲を染めなして、朝の太陽が海の上に上り、深い林と丘と牧場の霧を照す頃になると修道士達は老たフランス人に伴れられて山へ牧場へ林へ出でゝゆく。山へ登つて木を樵る者、畑に出て耕す者、牧場に行つて牛や羊の群を牧する者、或は院内に殘つて洗濯をする者、裁縫をする者、食事の用意をする者。凡てがそれ〴〵必ず數人若くはそれ以上の集團によつて爲される。

夕の鐘の響と共に彼等は手に手に鋤鍬を携へて修道院を指して歸つてくる。彼等は浮世と交渉を斷つたローマン・キヤソリックの一團であつて、天國に對する憧憬を以て神の前に跪いてゐる。憧憬の對象はマリアである。彼等の祈禱と勞働と沈默の共同生

活は彼等が神の子としての最上の生活と信じてゐる所のものである。彼等は凡ての物に等しい權利と責任とを有つ。そして厭くまで粗衣粗食に滿足し、彼等自身の意志に由つて選ばれた修道院長は天父に許されたる者として、彼等の上に立つて凡てを統括してゆく。院長の命づる所は天父の命であり、又彼等自己の心よりの命ずる所である。

勞働はそれに如何なる困難なことが伴ふても回避することを許されない。彼等は喜んでその困難と鬪ひ如何なる苦痛、如何なる不愉快をも辭さない。そしてそれが贖罪であり、天國への道であると信じてゐる。一切は自給自足の制度で修道院の必要品は凡て自らが作る。自ら種を蒔き自ら耕し自ら收穫し着物も自ら洗濯し自ら繕ふ。自らの手に成る不格好な大きな木履をはいて畑に出で林に入り、嶮しい山路をも辿つてゆく。有名なトラピストバターの製造場は修道院の裏手にある。畜舍、穀倉等の建物も幾棟も續いてゐる。初めてトラピストが本國から此函館へ派遣された頃、此所は荒寥たる不毛の原野であり、斧鉞を入れざる山林であつたさうである。

唯一つの木製の十字架が建てられてその周圍に粗末な小舍を作り、十字架を中心として不屈不撓の勞働が續けられ、今は四百町歩に養る收穫の豐かな沃野と美果の實る立派な果樹園と廣漠たる牧場とが出來上り、中央にはこの壯嚴な煉瓦の建物が建てらるゝに至つた。

永劫の謎を青く白く紫に暗示する星の光が、空に瞬き初むる頃になると、鐘樓の窓を漏れて夕べの鐘の音が響いてくる。韻律的なその鐘の音に何の力が潜んで居る事であらう。襟を正し眼を閉じて地に跪いて祈りたい樣な心持になる。

夕べの禮拜が始まるのであらう。修道士達は勞働の衣を祈禱の衣に更へて自習室より靜かに、物に怖づる樣に足音も立てずに mosaic の幅廣く光澤のある拭き清められた長い聖廊下を聖堂の方へ歩でゆく。聖堂の扉の前には眞珠貝に湛へられた聖水が備へ

てある。この聖水に手を清めてから闇を排して聖堂の中へ這入つてゆく。私も聖堂へ這入る事を許されたので、修道士達の爲す樣に手を清めて中へ這入つた。先づ跪いて胸に十字を切る。凡てが默々の中に行はれる。莊嚴な聖堂の內部には赤い小さな一つの常燈明が中央の天上裏に吊られてあつて、永遠より永遠へ灯つてゐるかの樣に、ゆるぎもせずに光つてゐる。聖堂の中の凡てのものは、この一つの微かな赤い光を浴びて幻の樣に、夢の樣に神秘な姿となつて浮んでゐる。薄暗い聖堂の中で修道士達は身も魂も忘れて等らに神に祈禱を捧げ、聖名を讃える。祈禱の言葉も頌詠も凡て莊重なラテン語を以て稱へられる。一定の祈禱がすむと、一人の修道士は聖堂の上に高い鐘樓の鐘を鳴らしにゆく。すると重々しい莊嚴な鐘は闇を縫ふて林へ、谷間へ、或は牧場の牛や羊の小屋を越えて津輕の海へ響いてゆく。やがて聖壇の前の金銀を鏤めた大燭臺の大きい蠟燭が一つ二つ三つと順々に點ぜられると聖堂內部の華美な裝飾がその光のゆらぎに應じて眼映ゆく閃めく。暫くすると今し點ぜられた大小數本の燭火が又一つ二つと順々に消されて最初の只一つの吊られた常燈明の赤い光りだけになつてしまつて、凡ては再びポンヤリとした幻と夢の樣な世界に變る。低い莊嚴なオルガンの音と共に私の未だ嘗て耳にした覺えのない異國の言葉で歌はるゝ讚美歌が唱へられる。そして又燃ゆる樣な祈禱は捧げられる。斯く祈禱と讃美と代る代る繰り返へされ、蠟燭は點ぜられては消され消されては點ぜられ、一定の時を措いて高い鐘樓より鐘の音が遠く響いてゆく。知らず知らず頭を下げて眼を閉づれば、心は永遠の知らぬ國へ彷徨ふ。

二時間に亘る夕べの祈禱が終ると修道士達は白い長い鬚の生へてゐる氣高い姿をした老いた院長の後に續いて、亡靈の樣に音もなく靜かに聖堂を出で、廣い修道院の奧深く何所へか消え去つてしまふ。私は聖堂をいで闇を辿つて、修道院の裏庭の美しいポプラの林の中の眞直な小徑を歩つた。

闇の中に浮く名も知らぬ白い花は、足下に仄かに薫つてゐる。微かの風に揺らるゝ林の葉づれは何事か囁くが如くである。何といふ靜かな宵であらう。そして何んと云ふ寂しい葉末の囁きであらう。私の靜まつた胸には修道院で聴いたり讀んだりした種々の物語りが浮んできた。

・　・　・　・

北イタリーの華かな或町の近くの丘の上の、欝蒼とした森に繞まれた古い修道院に、或る十六七程の乙女が這入つてきた。現實的な、煩雑な、浮世を外にした新らしい修道院の靜寂な敬虔な生活は彼女に喜びと満足とを與へた。毎夜マリアの御前に額づいて感謝の祈りを捧げつゝ幾日かの月日は過ぎた。然し深みゆく夜をゆらゝぐ蠟燭の灯の前に、獨り座すとき、何かしら堪へ難い淋しさに打たれたのであつた。そうする中に大海原の底の様な靜かな夜に修道院が包まれる毎に、彼女は自分の部屋に獨り深い物思ひに沈み、果ては眞白な衣の袖に顔を埋めてしく〱と忍び泣きに泣き續けるのであつた。こうした啜り泣きの夜は幾度繰り返されたことか。泣き濡れた尼姿を蠟燭の灯は幾度溶け盡す迄照したことか。星多い或夜のこと白い衣を纏ふた姿は人知れず修道院の裏庭の木立の間をくゞり抜けて、何所ともなく闇の中へ消え失せて了つた。翌朝の禮拝に彼女の姿を見なかつた尼僧達は驚いて彼女の部屋へ集つた。机の上には日頃讀み耽つた聖書の中に「父よ許し給へ。人の世に友を求めつゝ……」と云ふ走り書きが見出されたのみであつた。

若い乙女が修道院を逃れたといふ噂もやがて忘れられた幾ケ月の後、幾百里隔たれたエルサレムの殿堂の前に力なく倒れた若い女の旅人があつた。人々の手厚い看護も甲斐なく、長い幾日かの旅に疲れ果て、頬は見る影もなく衰へた乙女は、風雨に暴され破れた白い衣に包まれて息を引き取つた。その臨終に名も知らぬ看護の人の手に抱かれつゝ彼女は微かな微笑みの中に「私は人を求めつゝ人の世の旅に出

でました。今喜ばしく神の御胸に歸ります」と云つた。親切な人々は涙ながらにさゝやかな巡禮の墓を立てゝやつたと云ふ。云ふ迄もなく、彼女は幾ヶ月か以前に修道院を逃れ出たかの乙女であつた。

　浮世を離れた沈默と祈禱と勞働の靜寂な修道院の生活は、或意味から藝術的な、尊い生活であらう。然し傳習に囚はれた形式的な、型に嵌つた生活は彼女の人間らしい深い心の奥底の流れに觸るゝ事がなかつた。祈つても祈つても心の空虚は充されずして、徒らに果しなき涙にかき暮るゝのみであつた。只管に人の世を呪ひ、或は汚れに充ちたものとして修道院に逃れ、生の形骸に縋つて生きようとする時失望せざるを得ない。吾々は悲しみがあつたならば苦しみがあつたならば、惱みがあつたならば、それを強いて修道院の僞りの衣に押し隱して安住してはならない。涙を拂ひつゝも人の世に出て、人と人との峻嚴な試練を經て、其所に人間らしい苦しみに堪へつゝ深い愛に生きねばならない。彼女の修道院を逃れて、可憐にも旅に逝いた短い生涯は雄々しい人々の生涯を暗示してゐるのではないかと思ふ。

　私が津輕の海を越える時、船人から近頃東北のある青年が愛に傷いて修道院に這入つたと云ふ話を聞かされた。又同時に、二年前に修道院に這入つた或青年が近頃修道院を逃れたといふ噂も耳にした。

　人生を空と觀じ人の世の人との交渉を無意義として山に隱れた哲學者が山にも眞個の心の宿を見出し得ずして、幾年かの苦しい悶えの後に再び山を降つて來た。彼は世の人の間に交つて、山に逃れた以前の如くに語り笑ひそして生活した。彼の外觀は以前と殆んど變らぬけれど、内的生活は既に非常に著るしい差異を生じてゐる。彼の靈魂は鹿の溪川の水を慕ひ喘ぐが如く求めた人生の眞味に辿りついて居る。彼の生活は幾多の苦しい試練を經たものであり、人生の深い奥底に觸れつゝあるものである。京都大學の河上博士が青年時代に深く感ずる所があつて、凡ての有てるものを賣り拂ひ夫人とも別れて、

一冊の「聖書」と「藤村詩集」とを携へて、伊藤證信氏の「無我死」に走つた事實は、私らをして云ひしれぬ感慨に打たしめる。而して再び人の世に出て來つた事に、私は嚴肅な深奥な意義を認むる事が出來る。堪へ難い悲哀を白い寛衣に蔽ひ隱し、人の世を棄てた修道院の沈默の生活の美はしくも貴い半面に、多くの矛盾と、缺陷とを見出さぬ譯にはゐかない。「己を愛する如く汝の隣人を愛せよ」と聖書で學びつゝも、愛し得ざる不滿を如何しやうか。生の輪廓にのみ取り縋つた修道院の生活に安住し得ずして、幾夜か泣き濡れ、貴い靜寂の生活に心殘しつゝも、罪と汚れ多き人の世を慕つて修道院を逃れ出た乙女の心に、私は十分同情し得るし、偉大な意義を見出し得ると思ふ。（續く）

一週間の萬國祈禱會を守りて

前略。靑年會の祈禱週を與へられました事は只今の私共にとつて最も大切なそして感謝すべき事でございます。殊に學校のいろ〳〵の出來事の爲全校の生徒の心が浮々してそして中心を忘れて居た時かうした尊い時を與へられた事をどんなに感謝した事でせう。毎日の祈禱會が私共のいら立つた心を靜めそして淸くし勵ましてくれた事でせう。私共は本當に淚を以て御祈して居る惠まれた私共を深く感謝して居ります。未だ見知らない萬國の若い姉妹方と心を一にして祈る幸をどんなに感謝した事でせう。殊に先生方が祈禱會に多數御見えになつてそして熱心に祈つて下さいます事を私共は本當に力強く感じました。此度の祈禱會によつて一層會員が滿たされたやうに見えます。どうぞ御喜び下さい。

——（宮城女學校靑年會より）——

英國より佛國を經て再び瑞西に

河井道子

六月十九日にはニトベ夫人と巴里で落合ひ、一緒に倫敦に出立した。志立タキ子夫人の御長女ヤナ子樣は此夏ウエストフィルドカレヂを御卒業とて、忙はしい中から御訪問下され食事を共にして日本の話で花が咲き倫敦の雨を忘れさせた。同姉は十一月にある倫敦大學試驗の準備にかゝると云ふて旺盛な勢であるは嬉しい。誰に會つてもミス志立は立派な人格で將來日本の爲さぞ働かるゝだらうとの事をきく。其度に早く其時になれかしと祈つた。

六月二十五日は英國中央部に開催された全英國女子青年會大會に出で一週間を靜な品のよい避暑地に送つた。此大會で習得したことは英國婦人の眞面目な事である。宗敎上意見を異にする二派の代表者等の堂々たる討議は他できく事は出來ない。會長はボツマス伯爵夫人であつたが、其司會振の老練なる事、意見の確實なる事、議會法則に委しい事、私は呆然として終ひ、有爵夫人方の實力あるに驚かずには居られなかつた。英國では有爵夫人が會長であるならば、決して名譽的、裝飾的の位置でなく、實際の働をするのが普通だそうである。世間で知る通りアスター伯夫人は英國婦人代議士の嚆矢である。萬國靑年會々長のウオドグレプ夫人も貴族である。副會長に貴族が二名あるが、實力に於て決して遜色がない。英國は面白いデモクラシーの國柄ではないか。知識、敎養、實力等に於ては貴族も平民も區別出來ぬやうに一般的であるのは美しい。

英國は戰後の經營で宗敎や慈善事業に金が出ぬ苦しい時機にある。女子青年會の如き財政上非常な困

難を感じてゐるが然し悲觀はしてゐない。唯米國の如く外國に迄手を伸べて新しい仕事をなす事は中止の姿である。それでも私のやうな者の話に耳を傾け無名の寄附を日本の爲に受けた時、矢張り與へる精神は消えて居ない事を知つた。此苦しい場合の英國女子青年會が、日本の爲に六千弗に近い金を寄附せんとの厚志は何と感謝してよいかしら。日本も早く外國の爲にドシ／＼人も金も出せる樣に祝福され度いとの願が日々深くなる。

此大會後歸途をリバプールに立寄り岸領事と文子夫人とを訪問し、二日間の大歡迎を受けた。御住所の近くに教會の多い事を驚くと。

「こんなに教會に圍まれて居りますから、禮拜には出ずに居りません。どうか御安心下さい。」との夫人の御言葉であつた。同夫人の洋裝は非常によくお似合で趣向の上品なのに敬服した。

其後倫敦に歸り女子青年會の幹事養成學校に二日招かれて參考となるべき點を多く得た。當校は男子青年會幹事養成學校と講堂、禮拜堂、體操場、庭園を共同に使用し。或學課は共學になつて居る。之は米國とは全々異つた點である。此所にも日本の幹事を養成する時が來るだらうと教頭が云はれた。

七月十三日に倫敦を出て、スワニックといふ田舍に開かるゝ英國學生修養會に出席した。何しろ男子四百名、女子四百名と云ふ多勢が一度に來るのであるから設備が大變である。日本人は三浦太郎氏が他に二人の日本男子を伴はれたのと、志立孃と私とであつた。支那男子二名女子一名、印度人數名、其他外國人が四十名許り居た。講演は、聖靈、十字架、教會、永生、祈禱、傳道といつたやうな深い意味のものばかりであつた。確に英國の信徒學生は考へ深い。それは意見の交換や質問の有樣、山の樣に積まれた宗教書類の賣行き等を見てよく知れた。

歸途シェクスピアの生地に立寄り、半日をゆるゆる見物して倫敦に歸つた。シェクスピヤの家に這入るには入場券が必要なのでそれを求めに行くと、い

きなり「今日は、御きげんですか」と挨拶する赤面の英老人が居る。彼は欣然として四十餘年前日本に渡り、海軍兵學校の教師を爲し、船越氏を識つて居る等と話し出した。同樣の事を此老人からきかされた日本人が嘸多い事であらう。

七月二十六日の朝佛國に向つた。今度は英國海峽が非當に荒れて、何でもかでもゴロ〳〵轉り廻る程であつた。船客は一人殘らず醉た有樣であつたがさて上陸して見ると別に困りもしないのは有難い。ジヤンダークで有名なルアン市に着き馬車で別の停車場に馳せつけたが、目的地に行く最終列車が一分前に出たとの事で、不止得近所の怪しげな旅館に一泊した。

翌朝一番汽車で立ち目的地の停車場につくと田舍の事とて乘物は何もない。下車したものは私と郵便物だけ。仕方なしに荷物は皆停車場に預け、途中迄案内してやらうと親切に云つてくれた女の後について數町行つた。すると彼女は老人が先の方に徐歩して居るのを呼びとめ、此先の案内を依賴してくれた。今度は其老人に從つて數町行くと彼は之から眞直にゆけと指さして往つて終つた。畠を通り、森をぬけ、獨りで小唄を歌ひながら勇氣づけて行くと、欝蒼たる樹木の間に佛國式の大家が現はれた。此所だ〳〵と獨語しつゝ這入つて行き、大歡迎をうけたのは、物語めいた經驗であつた。

さて此所はノーマンデ地方にある舊家、或は御殿とも云ふ古いシャトーの一つである。持主は社會事業に熱心な佛國婦人で、女子青年會の働に興味を有ち、昨年よりして夏三ヶ月間は此古い大な建物を開放して樣々の女子青年の休養所、修養所にあてゝ居らるゝとの事で、私は高等女學校生徒の爲此家が用ひられて居た時、招待を受けて來たのである。私に與へられた部屋は二十疊位の大きさで、其三分の一を占めて居る大寢臺があり、椅子等は昔を語る錦で張りつめられ、壁の額はルイ十四世の全盛時代のものらしい。床下の穴藏は四人の爲であつたとか、ロ

ーックでみせて貰つたが、なか〳〵興味深いものであつた。

七月二十九日に再び瑞西に來た。此度は萬國學生同盟會に出席の爲である。日本からは元田作之進氏とフイシャー氏と私との三人が代表者として出席した。同盟會は男女合併である所から問題も廣く深く議論もなか〳〵盛んであつた。一夜は傳道の問題が討議され、十字架といふ事から信仰の立場の告白や辯駁が起り閉會したのは朝の一時半であつた。次の夜は又中歐並にエヂプトに於る教派の問題で、朝の一時迄論及し、其後九人の常務員が二時半迄の協議で、私が就床したのは午前三時であつた。是等の事を讀者に紹介するのは、如何に熱烈に眞面目に委員が働いたか又いかに同盟會が基督中心であるか、報知したい爲に外ならない。

此會議で、今後世界の加盟國が財政の負擔をせんとの議が決せられ、日本も其責任を負ふは當然の事とて元田先生と計り、少くとも一ヶ年に四五百圓は出したいと申出でた。支那は一千圓乃至一千五百圓印度も同額を申込んだ。競爭ではないが、日本も力の限りを盡すべきである事を痛切に感じた。兎も角其場で向ふ一ヶ年間の費用十萬圓が豫約されたのである。次に可決された新事項は、中歐國學生の救濟特に墺國の大學教授や、學生の飢餓救濟である。彼等の中には多くの餓死者があるといふ。ハンガリーも同樣であり、獨逸もなか〳〵の困憊で病死者、神經衰弱者が學生の間にも夥しいとの事である。斯る救濟案が可決された以上は少しでも實際の事を知る必要があると思ひ、ビエナ市の狀態を視いて來やうと決心した。

八月七日會が終ると直に立つて一行四人と共に維也納に向つた。此一行は實際國際的であつて、米國人、加奈陀人、墺國人、匈牙利人、日本人で、而も女は私一人である。墺國境稅關はまるで戰爭の樣な有樣で、汽車の時間は不規則、停車場の食堂には大概食物はなし、コーヒーには砂糖がない。誰を見て

も見素ぼらしい風をして居る。

翌朝其驛に下車して約二時間馬に乘り山の麓に來た時は空腹で苦しい樣であつた。前日から唯一度食事らしいものをした許りである。附言してをくが、汽車は有名な墺地リロル地方を通過し、アルプスを拔け、ダニユブの水源地に沿ふて走るのであるから風景は瑞西に勝るとも劣らない。實に美しいと賞嘆する毎に、墺友は「美しいが貧弱だ」と長息する。戰後の墺地は實に哀な狀態で幾千萬とあつた人口が僅に七百萬に減じ、面積は五分ノ一に足らぬ迄に縮小されて終つた。即ちハンガリ、ポーランド、チエコスロバキアの獨立、ルマニアの分割となつて、殘つた墺地は維也納を中心に「美しいが不耗」の地だけである。之が今日の困憊を來した原因をなして居る。

二臺の馬車が山麓に着したのは正午近くであつた休息所の女中に何か食物はないかと問へば「否」と答へ、桃色した飲物を呈するのみ、味ふと砂糖水に一寸紅を入れたものらしい。向側に雜貨店と記した看板がある。覗いて見るとガランとした空家のやうな中に、子供等が十人許り直徑六七寸位のブリキ製の淺い入物をブラ携げて走つて行く。何所へと尋ねると、「米國救助會の御晝御飯を學校へ貰ひに」と一聲に答へて飛び去る。

私共一行は荷物を預けて三十分許りの山登を始めた。登るとダニユーブ河畔の平原が次第々々に展開され、パノラマを見る心地で空腹も忘れ大元氣である。途中には牧場もあれば、果樹の並木もあつたが手入がしてない爲に林檎でも梨でも一口に食べられる程小い。私の爲と思ひ四人の男子が時々木影に休んでくれたが、强さを自慢に先頭に立つて汗をふき／＼活歩する私の姿は可笑しかつたに相違ない。急勾配であつたが近道をした爲、一時近くに頂上に達し大に歡迎をうけ、二日間の旅行の垢塵を清めて食堂に出た。一體此所は何か？

（未完）

讀書紹介（三）

——フォガッツァロ作「聖者」——

小野村林藏

■もう十年の昔となつた。私が東京の神學校を卒業した時に、私に洗禮を授けて下さつた大阪のB牧師から、「君に傳道してもらふため、奈良に新しく敎會を置く事に、ミッションで相談を決定したから是非來てくれ給へ」と、私の故郷が大阪である所から、其附近の地で傳道すれば何かと私に便宜だらうと思つての親切から、斯んな相談までして、愛に滿ちた手紙を送つて下さつた。古美術と歌と歴史とにみちた、あの櫻花咲く奈良の都は、私にとつてはかなり強い誘惑であつた。併し私は此好意あるB牧師の志に背向いた。そして自ら乞ふて北海の孤島佐渡ケ島へ赴任した。私の心の眼には、雪に埋れた孤島の草庵に、祈念し、冥想、讀經する日蓮の姿がちらついてゐた。私のやうな成つてゐない、土くれ同様の者でも日蓮の埋れた雪に埋れ、日蓮の聞いた波の音を聞いて、祈の生活を送つたなら、ちつとは魂も上達しやうか。斯んな果無い希望に勵まされて、私は佐渡に憧れたのである。夷といふ港から、私の預るべき講義所のある河原田といふ小さな町へ私を運んでくれたがた馬車が、初夏の日影のやゝ西に傾いた淋しい町に、一つの梱と私とを殘して喇叭を鳴らしながら去つて了つた時、私の心には祈がみちて居た。其日から、私は日蓮も聞いた筈の眞野の入江の波の音に朝夕親しむ身となつた。私が「聖者」を初めて讀んだのは、此の佐渡ケ島の生活中に於てゞあつた。

■島の中學校の敎師であつたM文學士の書架にそれ

を發見して、借りて讀み始めてから、讀了してしまふ迄、私は感激に滿されて、殆んど卷を閉ぢることが出來なんだ。それは修道院流の書物ではない。何所までも人間味が失はれずに、然も宗教に滿ち溢れた書物である。綠の山、降り注ぐ雨、流るゝ水、路傍の林、聳ゆる岩にも靈の脈搏が通ふて、神秘の霖霧は髣髴として讀者を包む。

■私の佐渡の生活は、僅に一ケ年で終りを告げた。夢想する所多くして、現實に得た所の尠なかつたことを自ら省みて恥かしく思ふ。併し佐渡生活中に計らずも讀んだ「聖者」の印象は、今なほ私の心に活きて、弱い私を策勵してくれる。「聖者」一卷を讀了して、無量の感慨にみちた胸を抱きつゝ臨日本海の汐のひた〳〵寄せる汀を、思に耽りながら彷徨ふたその夕暮よ。雪に白い金比山は夕陽に映えて輝いてゐた。越の松原の末は煙つて、さながら夢幻のやうであつた。私は夢見る人のやうに恍惚として歩いてゐた。あゝ喜ばしかつたその夕暮よ。汚い足跡にみちた私の過去半生中に於て、若し最も麗い感情に生きてゐた時を尋ねるなら、それは正しくその夕であつたらう。

■フオガッツアロの名は「聖者」によつて世界に知られた。彼の名は多分「聖者」によつて永久に人生に記憶せられるであらう。彼は敬虔なローマ教徒として、同教會中の進歩派の一巨頭であつた。今は故人となつた彼は、教職者では無く一文士であつた。併し其著「聖者」はさながら教典のやうに彼の黨與に貴ばれた。

■小説の主人公はピエロ・マイロニといふ一青年である。プレシャの名門に生れたが、早く兩親を失つて、ヴエネチアの親戚の世話になつて成長した。彼は其の親戚の娘と心ならずも結婚したが、不幸にしてその娘は結婚後間もなく發狂した。ピエロはこの不幸を悲しんで、沈欝な生活を送つてゐる時に、是れも不幸な結婚をして今は夫と別居してゐるジアンデサレといふ婦人と親しくなつて、遂に罪を犯すに

至つた。彼は暫らくジアンと不義の快樂に耽つてゐたが、死に際に不思議にも正氣に復した妻の聖徒のやうな美しい死に感動して、一度は失ふた信仰を恢復した。彼は女を棄て、財産をすて、或夜ひそかに家を出た。そして、かの聖ベネデクトが修業したといふ傳說で有名な岩窟に建てられたサクロ・スペコ寺院と、サンタ・スコラステカ修道院とで世に知られた北伊太利のスビアコといふ山間の小さな町へ來て、修道院附屬の畑地の耕夫となりながら信仰の修養に努めてゐた。

■ジアンは情人ピエロの失踪後、失戀の悲哀遣るによしなく、何時かは再び戀人と邂逅ふこともあらうと、儚ない事を賴みにしつゝ日を送つてゐた。小說は玆から筆が起されてゐる。

■ピエロの後を追ふジアン。敎權の迫害と戰ひつゝ次第に聖化されゆくピエロの靈的生命の聖高な姿。敎會の傳統に束縛せられて愚像のやうな生活中に悶きつゝある法王。宗敎を治世の方便と考へて民衆を愚弄する行政官。それらの錯綜した生活の中に脈々として流れて居る深い靜かな靈の泉。「聖者」は文藝品としての品質から見ても優れた物の一である。

■結構の骨子を略記すると、ピエロの修道院生活は不幸な誤解から終りを告げた。彼はスビヤコに程近いイエネといふ村へ移り住んで、畑地で勞働する餘暇に傳道を始めた。彼の單純な敎旨と、彼の生活の純眞とは人心に深い感動を呼び起した。多くの人々は彼に惹きつけられてイエネへ來た。彼には人の病を癒やす奇蹟力があるといふ信仰が民衆の間に起つて來た。彼の風評はローマにも聞へた。ローマ法王は彼の名聲を好まない。迫害の暗い手は彼の背後から現れて來た。彼は再びイエネを去らねばならなんだ。彼はローマに現れた。下町の或家の奥まつた一室に、彼の說敎所は準備せられた。少數の誠實な敎の友に圍まれて彼の傳道の生涯は續けて行かれた。彼は絕えざる迫害に惱まされた。併し彼を愛慕せる徒は日一日と增加して行つた。そして終に、彼が病

で倒れる時には貧しい人々の群が慈父に離れる心持を以て彼の病臥して居る家を圍んだ。ジアンは彼の隠れた擁護者となつて彼に知られずに盡力した。彼女の淋しい生活も愛する者の爲にする隠れた業に慰められた。そして終にピエロの最後の刹那に於て遂に信仰の人となつた。

■戯曲的の興味から云へば、ジアンがピエロを尋ねて來て、はからずもサクロ・スペコの聖堂で相會ふくだり、及びピエロが月澄む一夜ヴアチカン宮殿の一室で法王と相語るくだりなどであらう。

■全卷を通じて震動してゐる敬虔と神秘との空氣はまことに愛たいものである。巧に描寫せられた靈的經驗の自然であつて然も深い神秘を湛へたる、我ら宗教の信仰者にとつては心跳る喜びがある。宗教的思想に於ても我ら新教徒の共鳴する所が甚だ多い。「聖者」一卷を讀破せられた人々は、容易にその單純にして深みのある信仰に同情を感ずる事が出來るであらう。

■私は一友人と共力して先年「聖者」の和譯を警醒
社から出版した。幸に一版を賣りつくしたが、背律
の都合で、今は絶版の姿になつてゐる。出版して後
に讀んで見ると、譯文の意に満ない節が多い。後日
機會を得たなら、全文にわたつて、思ひ切つた訂正
を試みたいと思つてゐる。英文の讀める方は、英譯
で御讀みになつて頂きたい。チープエディションも
あるから、却つて私の拙な譯本よりは安くて買へる
筈である。(十一、十七)

星をめあてに

大磯仁

出る人——

水夫七名

船長一名

見張番一名

ある船の甲板の出來事。

・　・　・　・

（右手左手より七名の水夫思ひ思ひに不快らしく登場。或者は横になり、或者は坐し、ある者は立ち、また膝かく。其中の一人立ちて）

A水夫。お前らは今の船長の話をどう思ふか知れないが、俺は如何しても信ずることが出來なかつた。この船は今まつしぐらに新大陸をめがけて進行しつゝある。やがて間もなく、驚くべき榮光と幸福とにみち／＼た樂園を見出す事が出來ると、かう船長は斷言したが、本當に我らの前途は喜びと光りにみちたものであるだらうか。一體俺達が港を後にして、此太洋の唯中へ乘り出してから幾日になると思ふのだ。

B水夫。俺も昨夜ハンモックの中でその事を考へてゐたがたしかに五十日にはなるらしい。

A水夫。さうだ、五十日にはたしかになつた。それなのにまだ俺達の目に入るものは眞青な海と、白い雲の流れる漠々たる空ばかり、なつかしい陸地は何所にあるやら。見ゆる限りは、はてしない水の上に唯一隻の船が走つてゐるだけである。「明日になつたらきつと島影か何かを見出すだらう。今

日だけの辛抱だ」と船長はもう何十日の間繰り返したことだらう。いつたい何時になつたら其樂園につくのか。果して其新大陸につく事が出來るのか。俺の不安な心は疑はずにゐられない。

船長の思つてゐる希望確信は跡かたもない幻であり、俺達は盲の手びきに從ふ盲のやうに、やがては海のもくづ、とうたかたとなる運命のもとに、今破滅の海を走つてゐるのでないと誰が言ひ切れやう。俺は此事を幾日考へたか知れない。しかも毎日疑ひは疑ひを生んで苦しくなる許りである。お前らは是をどう思ひ、どうし様として居るのだ。俺はそれがきゝ度い。

C水夫。さあ、この眼とこの痩せこけた腕とはお前の問に答へるだらうよ。以前は此眼の中に希望が燃えて居た。此腕は新しい飛躍を思つて鳴つてゐた。しかし今は何所にその生氣は見出されやう。毎日々々明けても暮れても此單調な眼界は、此眼から希望を奪ひとつてしまつた。烈しい嵐と食物の缺乏から來る疲勞はいつか此腕をこんな力ないものにしてしまつた。俺はもう此苦しみに堪へられないのだ。勿論俺は船長の立派な人格を信ずるがそれだといつて此航海の前途についての考へが全然あやまりなしと斷言する事は出來ない。若し過つてゐたら…………。あゝ、考へても恐ろしいことだ。我らはどうなるのだ。

D水夫。(寢て居て歌ひ出す)

荒野の原みちもなく、踏みわけかねつゝ
佇める身を　あたは嘲み笑ふ。(讃美歌二四六)

(起き上つて)かうすればいゝのだ。引返すのだ。この事を除いて此苦しみから脫するためには、海へ飛び込むばかりだ。海へ飛び込む事が出來ない限り、引返す他に道はない。俺は此ことを幾晩も考へて見たが、とても船長の希望に信頼して行かれぬに於ては、只一方の血路を此所に置く他はなかつた。只引返す事だけ。他に間に合せはきかぬ。

E水夫。然し俺達は港を出る時船長に一切をまかせ

ると誓つたではないか。

D水夫。さうだ誓つた。然し君は生命が惜しくないのか。否此單調な日々に堪へて行けるのか。

E水夫。して其具體的の實行方法は。

D水夫。これも分りきつた事ぢやないか。意志さへあれば、方法はすぐ決定する。先づ船長の反省を促し、若し承諾せなかつたなら腕力に訴へる迄だ

G水夫。腕力に？

D水夫。さうだ。腕力に、お前はなぜそんないぶかしげな顔をするのだ。それともお前は倘航海を繼續して終には破船し、大洋のうろくづ共を喜ばそうとするのか。そんな事はあるまい。また腕力を用ひるといつた所で、殺すのなんのといふのではないんだ。さあ異存があるなら聞かう。この懶い單調な苦しみから逃れなつかしい故郷へ歸るのだもの、異存があらう筈がない。異存がなかつたら手を擧げて貰う。(皆手をあげる)よろしい。ぢや一刻も早く始末しやう。誰か船長を呼んで來ておくれ。

（A出て行く、暫くして船長を伴ふて來る）

船長。何かお話があるそうだが、何ですか。

B水夫、船長、實は少しくあなたの御反省を要求したいと考へて一同でお呼びしたわけです。

船長。僕に惡い所があつたら何でも改めませう。その反省すべき事とはどんなことですか。

C水夫。簡單に云つて終へば、あなたの新大陸への航海を斷念し、再び故里へ歸航して下さる事です

船長。それはまた如何なる理由で……

D水夫。理由は私が申しませう。こう申しては失禮かもしれませんが、私らは只今ではあなたに信賴して行く事が出來なくなつたのです。あなたは新大陸を見出す事が出來るといはれ、我々は其お言葉に從つて今日まで長い間働いて來ましたが、もはやあなたの新大陸を信じる事が出來なくなりました。我々はまぼろしを追ふことが出來ませぬ故に、是非あなたの反省を促して歸航しやうと思ふのであります。

船長。よろしい解つた。だが僕は君たちの質問に答へる前に一つ問ひたいことがある。君らは本當の生き甲斐ある生き方を望むか、望まないかと。

E水夫。それは解り切つた事です。出來得るなら、本當の生きかたをしたいものです。

船長。出來得るなら、などゝいふ卑怯な考へは捨てたがいゝ。本當に生きるといふ事は眞劍な生命懸けなこと、これより嚴肅な事實はあり得ない。君らは始め、僕がこの航海を計つた時、我々はもつと眞實目な生き甲斐のある國土に行きたいから是非連れて行つてくれと言つたが、僕は今日のやうな日の事を考へて豫め君等に質問した。新しい道を行くものは常にその道が血液をもて贖はるゝ荊棘の道であることを覺悟しなければならない。それでも君らは行くかと。僕はあの時君らが一齊に瞳を輝して決心を言ひ表したが故に同行を約したのです。今君達はおめ〳〵歸るといふのですか由來、先見の歩む所は常に痛ましい棘の道です。ある者は額につばきせられ、石にて打たれ、終には十字架につけられた。或は燒かれ溺らされ猛獸の飼食となつた。然し彼等のかゝげた炬火は消ゆることなく炎々として永遠に光り輝き、人類の至るべき福祉を示してゐるのです。而も今日迄我らが共に歩み來つた道は、彼等先見に比してどれだけの苦しみと云ひ得やう。我らの行手の空には燦爛たるベテレヘムの星が光つてゐて常に正しい針路を指し示して居る事を忘れてはならないと思ひます。星をめあてに遠く博士達がベテレヘムへ急いだやうに我らも進むべきではなからうか。あゝ、其上に、僕は君らに告ぐるに新大陸は最早遠からざるをもつてしたひのです。で僕は君らの要求を容れて引き返すわけには參りません。

F水夫。私らもさうした決心と希望をもつて來ましたが、まあ、この惱ましい一本調子な空と水とを見て下さい。毎日同じ水と空。私らはもう氣がち

がひさうです。また、あなたの命令で、あれ（指さす）マストの上には見張の者が毎日上つてゐますが、いつになつたら目ざす新大陸を傳へる事でせう。私はどうしてもあなたの言葉を信ずるわけに行きません。我らは引返すべきです。

船長。もつと氣を強く持つべきです。男らしく心を引きしめてゐれば、何の恐るゝ者もないでせう。

G水夫。では、どうしても進みなさる積りですか。

船長。折角此所迄來たのに、どうしておめ／＼戻られませう。僕はあく迄進行するつもりです。

水夫一同。ぢや、今私共が跪いて懇願しても。

船長。そうです、懇願しやうと、哀願しやうと僕の志をまげるわけには行きません。

A水夫。この腕にかけても、その空虚な希望を捨てやうとなさらぬか。

船長。火が降らうが、矢が降らうが、天地がさけて終つたとて、どうして此信念を捨てられませう。

B水夫。今は是非ない。我々は我々の腕力によつて自由にするまでだ。（一同船長を捕へる、其時 突然頭上より大聲で。）

見張者。何を馬鹿な眞似をするのだ。愚か者、愚か者。蟲けらに等しいもの丶くせに。太陽の樣な船長樣と爭ふなど丶はもつての外だ。なぜ早くデッキに額づいてお詫びをしないのだ。（水夫一同呆然として上を見る）

C水夫。どうしたと云ふのだ。見張番。お前は氣がちがつたのではないか。

見張番。氣がちがつたのは此方でなくてそつちだ。今俺が下りて行くから顏でも洗つて來い。

たとひ地はかはり　山はうなばらの
なかにうつるとも　われいかで恐れん。（讃美歌二三四）

（見張番の歌ふ聲近くなりやがて登場。いきなり船長の前に跪いて）

見張番。船長樣。こ、これを御らん下さいまし。（手に持つて居た小いものを示す）

船長。あつ。これは生き／＼した橄欖の若葉だ。お

、さては我思ひ通り陸地に來たのか。

見張番。只今私の見張して居る前へ、青い羽毛の見慣れぬ一羽の鳥が來て止りました。そして其鳥がくはへて來て、落して行つたのがこの美しい橄欖の若葉です。これによつて見ますと、陸地は最早間近いに相違ありませぬ。

船長。さうだ。終に新大陸は我前に來た。而も彼所は此若葉によつて見ても豊かな土地に違ひない。勝利と希望よ。ペテレヘムの星の導きはあがむべきである。

水夫一同。（跪いて）船長樣。心ない者の只今の御無禮はどうぞ御許し下さい。

船長。許すも許さぬもない。皆君達のお陰だ。今は恩の日、喜びの時である。一刻も早く到着するやう、全速力をもつて進行しやう。さあ、其の用意を。

水夫一同。解りました。さあ全速力だ。全速力……

（一同各部に急ぐ。退場）

本部より一筆

□日本基督教女子青年會本部は神田錦町一ノ十六に移轉致しました。讀者諸姉の御記憶を願ます。電話神田三六五二。

□此所に働いて居ります者は總幹事ミス・スカツト、事務幹事ミス・レオナ・スカツト、同堀順子、編輯部幹事淺井治子の四人です。默々として各自のつとめを勵んで居ります。

□何かにつけて待たれるのは河井先生のお歸りです。然し確かた時は知ることが出來ません。先生は文字通りの東奔西走、廣い舞臺で少しのひまもなく活動の御樣子です。

□八月號の紙上で公告せられました通り東京青年會では會員に雜誌を進呈する事は廢しました。同會員には直接本部から購讀をお願ひして居りますが、多い中の事故伺ひ洩れもあらうと思ひます。讀者諸姉はどうかお友達に本誌を御紹介下さい。一人の誌友が一人のお友達に紹介の勞を取つて下さる事は私共にどれ程の助となるか知れません。御盡力を切にお願ひいたします。

□雜誌代は振替でお送り下さるのが最も安全で且簡單です。前金切れの方々は可成年内にお拂込を願ひます。

プリマス情話（下）

ロングフエロー
村岸榮子譯

アルデン青年が隊長の家へ歸り着いた時、マイルス・スタンデイシは猶シーザーの物語を手離さずに坐つて居た。彼は入り來る青年の方へ向き直り乍ら結果の如何を懸念する風もなく、只返事を待ち佗ぶる者の樣に氣輕にものを言ひかけた。

「ひどく手間が要つたぢやないか。尤も間には森が一つあるけれど大して遠い家の筈ぢやないがね。君の手間があんまり要つたものだから、其間に僕は十回以上の戰爭を此所で濟ませた所さ。さあ、そこで報告を伺ひますかね。」

一部始終を詳かに聽き終るとプリマスの隊長は飛び上つて怒り猛つた。彼の蹴附ける靴音で壁に懸けた銅や鋼鐵製の武具は不祥な響を立てゝ鳴つた。彼は大聲を擧げて怒號した。

「ジョン・アルデンよ、汝は僕を裏切つた。此僕を汝の友なる此マイルス・スタンデイシを！　汝は僕を押し除けた。騙つた、賣つた。汝はフレンドシップに對して謀逆を行つた。一つ家に起居し一つ盃より飲み交したその汝、最も神聖なそして同時に秘密な思想も名譽も盡く委ねたその汝、汝も亦ブルータスであつたのか。あゝ禍なる友情よ、今後我等の間には爭鬪と嫌惡あるのみ。」

彼の怒り半ばに一人の使者が馳せ來つて土人の襲來と危險の逼迫とを告げた。老隊長は一寸思案して間もなく武具を纏ひ、革帶を引き緊めて險しい面のまゝで出で立つた。一人取殘されたアルデン青年は次第々々に遠退き行く足音をきいた。そして立ち上ると闇の中に天を仰ぎ稚子の如くに手を組み合せて秘かなるに見給ふ神に祈つた。

こなたは怒り立つ隊長、會議所に來て見れば既に大勢の人々が彼の入來を待ち佗びて居る所だつた。

傍には一名の印度人の使者が挑戰の徴の響尾蛇の皮に一杯箭をつき刺したものを持つて立つて居た。彼は直ちに挑戰に應ずる旨を答へて使者を追歸した。

・　・　・　・

翌日の朝まだ灰色の狹霧が一面に立ちこめて居る頃に、隊長スタンディシは一名の印度人案内者と八名の部下とを引具して威風堂々、霧から霧の中へと進軍して土人遠征の途に上つた。紫色の山嶺から太陽が洋々として上ると、俄に明け放れた世界には小鳥が歌ひ交し家々の營みが始められた。天氣晴朗、愈々メーフラワーは解纜するのである。袂別の號砲は幾度か爽かなる朝の天地を震働し、山や谷にこだま返した。男も女も子供も皆濱邊に走り出て去り行く帆影を涙に曇る眼をあげていつ迄もいつ迄も見送るのであつた。アルデン青年はメーフラワーに乘り込んでプリマスを去り、かくして永久に今の苦惱を葬らうとして居たが、ふと犇めく群の中からプリシラがぢつと我身の上に注いで居る恨む樣な責める樣な、哀求する樣な悲しげな眼の光に射られて、思はずも本態的に踏み止まつて終つたのである。

「私は止まらう、さうだ、彼女がふみ行く土程神聖な土地は他になく、彼女が吸ひ込む空氣の樣に新鮮なそして健康な空氣は他にないのだ。彼女のために私は止まらう。そして見えざる存在として彼女の身邊を守り、彼女の弱きを支へやう。丁度此陸に上陸した時に私の足が第一着であつたと同じく、此所を去る時には亦最後であらねばならない。」

いつ迄もいつ迄も、砂濱に立つ聖團は地平線下に渺茫としてかすかに帆影を止める懷しいメーフラワーに無言の別れを告げて、それから共に神に祈つて力を得たのであつた。悲しげに大海の波濤は巖の下に咽び死の丘の上の青麥は首を垂れて聲を潛めた。人々がそれぐ家路を指して戻つて行つた後、最後迄アルデン青年はプリシラと共に渚に殘つた。たつた昨日迄、他人のためにあれ程熱心に說き得た彼は今や言ふべき言の葉もなく、手持無沙汰に默して立

つのみであつた。

「ねえ、私達はあるが儘に、そして考へるが儘に正直にお話し樣ぢやありませんか。いつでも眞理と友情とに忠實に。私は貴下と御一緒に居る事、貴下とお話しする事、貴下に御目に懸る事が一番嬉しいんですの。私こんな事申上げても、少しも恥づべき事だとも亦秘すべき事だとも思ひませんわ。私は眞實をお話し申して居るんですもの。ですからマイルススタンデイシ隊長の愛なぞよりは、貴下の友誼の方がどれ程私にとつては貴い事でせう。」

プリシラは少しも惡情れずに云ふのであつた。アルデンは彼女の指し出した手を固く握り占め乍ら、今迄血を流し痛んで居つた胸の傷をすつかり忘れて感激に滿ちた聲で答へた。

「さうです、我々は永久に友人であらねばならないのです。そしてあなたに友情を捧げる者のうちでこの私を、あなたに最も近い、最も忠實な、最も愛するものであらせて下さい。」

この間に數ケ月は經つて、秋に入ると一艘の商船がピルグリム一行に故鄉の友人や親戚やを送つて來た。穀物や家畜をも齎せた。村は平和であつた。村人等はそれ〳〵の勞働に忙しかつた。或る小春日和の午後に、アルデン青年はプリシラの糸繰る傍に坐し乍ら、こんなお話をした。

「ねえプリシラ、私はあなたが一分たりとも手を休めずに他人のために思ひ乍ら、さうして糸車を廻しては紡いで居る姿を見ると、あなたはもうプリシラではなくなつて、あの美しい紡ぎ姫のベルタの姿になつて見えるんです。あなたは美しいベルタ姫だ、ヘルヴエシアの女王樣だ。彼女は小馬に乘つて谷を行く時でも牧場を過ぎる時でも、鞍に結びつけた糸竿から糸を紡いで、いつも勤勉に又善良であつたといふので物語りに殘つて居るのです。私は同じ事をあなたにも云ひ度い。そして百姓の家に糸とり車の廻らぬ日が來ると、母親達はその子供時代にプリシ

ヲといふ紡姫がどれ程勤勉であつたかを語つて、子女を戒める料とする事でせう。」

「ではあなたも勤勉でいらつしやらねばなりませんのね。私が主婦としてのよいお手本なら貴下も亦良人としての好典型をお示しなさらねばなりませんわね。今私が卷きます間、貴下はこの束絲を持つてゝ下さいね。そしたらきつと此後風俗習慣がよし違つても、父親達は必ず昔のジヨン・アルデンの事を語り傳へる事でせう」とプリシラはアルデン青年の賛辭に答へた。

若い愛人同志がかく樂しげに糸を卷いて居る唯中へ、一人の村人が息せき切つて恐しい消息を告げに來た。マイルス・スタンデイシが死んだ、彼は印度人の毒箭に當つて斃れた、恐く土人共は町中へ入り込んで人家を燒き拂ふであらうと。

是は死せざるスタンデイシが一土人を遣して知らしめた僞の報知であつたのである。アルデン青年は此の知らせをきくや恰も友を刺した毒矢の矢鏃が自分の胸をも共に刺し貫いて、自分を彼の俘として束縛する絆を永久にたち切つたとでもいつた、自由の身になつた過度の喜びと、同時に慚愧と苦痛との入り混つた情感で殆んどなす所を知らず、無意識の中に固くしつかりと立像の如くに立ちすくむプリシラの身體をかゝへてかく言つた。

「主の合せ給へるもの人之を離すべからず。」

・　・　・　・

雲の帷りをあげて紫と緋の天幕の間から太陽が靜々と上つて、アルデン青年とプリシラの結婚のばら色の晨は輝かしく明け渡つた。彼等はプリマスの先輩や友人等の前に立つて、簡單な然し敬虔なピユーリタンの式にならつて和蘭風の結婚式をあげるのであつた。最年長者の一人が起つて、愛に依つて結ばれた者の家庭と竈の爲に祝福を祈り初めた頃、鋼鐵の武裝をした人の悲痛に滿ちた姿が入口に現れた。一と時餘りこの招かれざる客人は人の目にふれずに佇んで居た。彼の眼には暖い心の閃きが現れて、柔

和さが浮んで居た。一度彼は手をあげて物云ひたげに唇を動かしたが、内なる冷靜の意志がそれを抑し止めた。斯して誓約と祈禱と最後の祝禱が終ると、彼は部屋の中へと進み入つた。見よ、人々はマイルス・スタンディシを見たのである。彼は新郎の手を握り乍ら感激に滿ちて云ふ。

「君、赦してくれ。儂は長い間怒つて氣を惡くして居たのだ。然し今は神に感謝する、それはもう過ぎ去つて終つた事だ。このマイルス・スタンディシは今こそ眞にジョン・アルデンの友人なのだ。」

新郎はそれに答へた。

「我々の間には愛する尊い昔ながらの友情の他に何物もあつてはなりません。そしてそれは今後なほも堅く且尊いものとなつて行くのです。」

それから隊長はプリシラの前に身を屈めて敬禮を捧げ乍ら、結婚の喜びを陳べ亦彼女の良人を聲高に褒めそやした。

の日にやけた健康な顔を見て一樣に驚駭した。然し再會の喜びは一層に深くあつた。

アルデンは新婦を導いて入口に立たせた。彼はプリシラを己が誇となした。彼女は百姓娘のやうにいい、どた〳〵歩いてはならない。彼女は女王の樣に乘馬で行かねばならないのだ。それでプリシラは樂しげに打ち笑ひつゝクッションに身を任せて彼女の小馬に乘つたのである。

「これでよい、何もかも、たつた一つ足りぬものは糸竿だけ。それが揃つた時にこそ、御身は眞に私の女王、美しいベルタ姫となるのだ！」

樂しげな妻と良人とは友人等と愉快に話を交しつゝ、婚禮の行列を進めて行つた。森の中を行けば小川は前を過ぎ行く愛の像を見て喜び躍つた。黃金色の葉の間から太陽が紫色に熟した山葡萄の實にきら〳〵しい光を投げるあたり、プリマスの原始的な森林を通つて婚禮の行列は靜々と練り行くのである。

横濱靑年會報告

去る九月當市山手に開きましたレジイデンス(外人寄宿舍)も米國より今秋ジョーダン會監の御來濱を得て完成さるゝ迄に至りましたが、尙每日相當に忙はしく働く事の出來る程に本會の事業が步一步と發達しつゝある事を感謝して居ります。從來の事業が擴張されつゝある外御報告申上度は

一、**宗教部**――靈交會、之は四週間前より始められた日曜日午後の禮拜です。每日曜日午後三時より會館に京濱の宗教家を招聘して說教を願ひます。至つて家庭的な集りで會後茶菓を共にし會員も職員も此日だけはユックり語り合ひます。

一、**教育部**　此度コーラス科が出來ました。敎師はミスドレバー、一週一度、生徒は三十五名。會長初め職員の大多數は此日を樂しみに歌ひます。

一、**クラブ**、(イ)有職婦人の爲、十一月九日に發會式が行はれました。此會合は精神的にも事務的にも眞に見事なもので當市有職婦人の有望なる將來を知らしめられました。會員は四十名近くです。(ロ)若奧樣クラブ、會員の依頼により十一月十七日創立發會式を行ふ筈になつて居ります。當日は文學士菅原教造先生の「小供の偉大さ」といふ御講演がある筈です。

一、**移民部**、同部幹事日比忠子姉は今回縣廳移民協會囑託となり米國航路船川帆毎に二日宛同協會に出張せらるゝ事となりました。之により今迄と異り移民婦人の全部に接する機を與へられ同時に講習後之等の婦人を本會に招待する事が出來ますのは眞に喜ぶべきことであります。

一、**第四回總會**、十一月二十四日開催いたします。當日は午後五時から夕食を以て始め、六時半議事に移ります。今春の募集運動により八百人近くの會員を與へられました當日は之等の會員が多數出席せられ、會員としての使命を感じ、來らんとする一年間の働の爲大いに援助する所あらんとの精神を盛んにせらるゝやう、又會員相互及會員と職員との親睦の一層あつくせらるゝやう祈つて居ります。

(横澤氏報)

貴會のクリスマスの御計畫は？

どのやうな方法で「與へる歡喜」を經驗しやうとしていらつしやいますか。

○遺愛女學校靑年會

近所の貧民に炭俵一俵づゝ配布する豫定。

○フェリス女學校靑年會

在校の生徒に玩具や布類を出來るだけ寄附して貰ひ、私共が手を入れたり組合せたりして贈物に致します。そして生徒達に愛くるより與へる氣持の喜ばしさを感ぜさせる爲にサンデースクールのクリスマスには生徒を招待して喜びを分たせるやうにいたします。

○上田梅花幼稚園靑年會

當地在住の盲人を一夕招待し慰安の催をしたい事。貧民達にお餅を籠に入れて與へる事此二つの計畫の愛を込めた實行を會員一同希望致して居ます。

○宮城女學校靑年會

一、例年の通り外村先生の御事業なお助けしたい事。二、草津の癩病々院に寄附したい事。之等の爲に私共は之から働いて收入を得それに靑年會の基金を加へて送るつもりです。三、當地の貧しい病人にクリスマスの意味を教へるのに應しい贈物を送る事にしてゐ

ます。四、育兒院　お金と品物とを送る事。

○東京女子大學青年會

毎年のクリスマスの祝賀會を青年會が主催て致して居りましたが、今年は學友會と共同して催す事になりました。校外の事業にお助けする事の出來る程に私共の會が熟して居りません。然し學友會と共同してエスの御誕生を祝する一機會を利用して相互が一致協力し常には學ぶ事の出來ない敎訓を得、自らを捨てゝ盡す所に與へる精神の限りない尊さを經驗したいと思つて居ります。

○東洋英和女學校青年會

一年間青年會の會員が活動して作ります財産中から方々へ寄附を送ります。

○女子英學塾青年會

多分今年は近い數人の方々を個人的の必要に應じてお助けすることになるでせう。今の所此道が一番自然で又實のある働が出來そうに思へます。クリスマス禮拜は昨年と同樣にし其後青年會の方々や學生支部の方々をお招きして親睦會を開きたく考へて居ります。

○共立女學校青年會

私共の方では別に計畫は致しません。只お

然し毎年十一月の感謝祭には各自が感謝を分つため物質的に缺乏して居らるゝ方々に贈物をいたします。

○プール女學校青年會

今年は北清の饑饉の爲にプレゼントを贈る事、日曜學校をもつと傳道的にする爲クリスマスには初來の人にでも何か贈る事。

○尚絅女學校青年會

北支那へお金を差上げる事にいたしました私共のいたします事故多くは出來ませんが二百九十圓程差上げる事が出來ると思ひます。

○金城女學校青年會

毎年之といふ計畫もございませんが、今年は私共會員が懸命に働き、今迄に例のない「與へる歡喜」を充分に味ひたい考へで居ります。今の所具體的の案は立てゝございません。

○橫濱英和女學校青年會

昨年の通り孤兒の爲少し許りなりとも贈物をする事を一同等らなる希望といたして居ります。

○靜岡英和女學校青年會

今年は生徒間互の贈物を廢しまして其お金を岡山孤兒院と瀧ノ川孤兒院とに送る計畫で

摘要

△本誌代金は總て前金にて御拂込被下度　前金切れの捺印有之候節は直に御拂込被下度候

△御送金は振替にて拂込まるゝ方便利にて且間違も無之候、但手數料壹錢を御加へ下され度候。

△振替、東京、貳參七貳參番

一女子青年界一定價及廣告料

定價郵稅共

	内地	海外
一部	金十五錢	金拾七錢
一年前金	壹圓五十錢	金壹圓八拾錢

廣告料　一回掲載

全頁	半頁	四分一頁	一行
金拾五圓	九圓	金五圓	金五拾錢

年極又は回數により割引有

大正九年十一月廿八日印刷納本
大正九年十二月一日發行

發行所　神田區錦町一丁目十六番地　日本基督敎女子青年會　電話神田三六二五番　振替東京二三七二三番

發行兼編輯人　河井道子　神田區錦町一丁目十六番地

印刷人　前川吉太郎　芝區三田和泉町七番地

fitting that just such quiet moments of fellowship together should follow the busy Bazaar days when the girls gave so generously of their time and energy in their friendly ministering to the Convention guests.

Abort twenty-five girls are now enrolled in the regular typewriting class under Miss Lacy's supervision A new class has also been formed for advanced students, with six girls enrolled. These girls are proficient enough in English to study shorthand as well as typewriting; they will also have work in business ethics and conventions. This class is the realisation of a long-felt desire and will fill, it is hoped, a real and vital need in the life of Tokyo business girls

At last the Tokyo Gymnasium is being put to its real use. Miss Ferris is conducting two classes a week in addition to her langauge school work and these classes are steadily growing in popularity and size. One class is in aesthetic dancing and open to Japanese gymnasium teachers only. The other class is in general gymnasium work and enrolls Japanese and foreign secretaries, langauge school students, volunteer Japanese workers, and foreign friends of the Association. Miss Ferris will give a demonstration of organised play at the next meeting of the Christian Teachers' Club, before whom she gave a talk last month on the importnnce of Play. Her contribution also to the parties held at the Association is a large one.

Miss Sakamoto is giving a half day each week at St. Lukes Hospital, conducting a course in dietics for nurses. A large number of these student nurses attended the student party October 30th at the Kanda building and enjoyed the Hallowe'en frolics.

Miss Kato went to Osaka on the 17th of this month to assist at the Board Members Conference to be held there. She will also visit the Kobe and Kyoto Associations while away.

KYOTO Y. W. C. A.

Kyoto spent November putting through it's first membership campaign While there have been resident Secretaries there for two years the Association has felt it wise to reach the girls of the city as far as possible without membership. Upon the opening night, Nov. 5th a Woman's Mass Meeting was held in the Y. M. C. A. Hall for which a special educational program had been arranged. Fifty-two girls from various schools of the city presented the Japanese translation of "Everygirl." They entered into it with the very finest spirit and the Association was pleased with the precedent set for Kyoto pageantry.

Miss Jane N. Scott and Miss Nishino of Osaka spoke upon what the Association is doing in the world and what it means for a girl to join such an organization. Many of the six hundred Japanese women present heard Miss Nishino for the first time.

The Kyoto Association entertained more than one hundred foreign guests during October and November. Many of these paid a membership fee and have been placed on the mailing list. Among those paying the fee was Miss Margaret Slattery.

Monday,	Nov. 15	—Members' meeting, 2 P. M. Address by Mr. Kawai
Tuesday,	Nov. 16	—Devotional meeting before nightschool, Special invitation to teachers and aim to interest them in Bible study. Reflectoscope pictures of Life of Christ.
Wednesday,	Nov. 17	—Evangelistic meeting, Naniwa Church, 7 PM. Address by Nishino San.
Thursday,	Nov. 18	—All-day Board Members Institute, 9 AM—5 PM. Miss Scott and Kato San, leaders.
Friday,	Nov. 19	—Devotional service before nightschool

YOKOHAMA Y. W. C. A.

The Educational Department of the Yokomama Young Women's Christian Association is deeply indebted to the American Consulate, since three of the classes are being taught by wives of men who are in the American Consular Service in Yokohama. Mrs Schnare is teaching foreign cooking, and Mrs Boynton and Mrs Walton are helping in the English Department. Mrs Leo Wesley Chamberlain, who was formerly a teacher in Kobe College, has also offered her services as a volunteer teacher and Mrs Durgin and Miss Draper are carrying the Music Department.

Two new clubs have just been organized. One is composed of business women from the offices and stores of Yokohama. The efficent way in which these 34 business girls took hold of their first weeting is an indication of the big things that will be accomplished by this new Business Women's Club. The other club is composed of young married Japanese ladies. At their first meeting, officers were elected and a lecture was given on Child Psychology. These two organizations, together with the Louise Club, which is composed of students, will be a great asset in the life of the Association membership.

"The Residence" for foreign girls and women has proven its worth in the last month, for 45 women have taken advantage of its privileges. The arrival of Mrs E.A. Jordan, who comes from Seattle to take charge of the Residence, is eagerly awaited. Until she comes, Mrs James Scott, who ceme to Japan as a delegate to the Sunday School Convention, is acting Residence Secretary, and her assistance there has been invaluable.

Frequent appeals are being heard for a gymnasium class for foreign girls and women. With the possibility of the Gymnasium of the Y.M.C.A. being used for this purpose it is hoped that such a class may be organized in the near future.

TOKYO. Y. W. C. A.

Miss Clare Armstrong, who came out to the S.S. Convention, will remain in Tokyo and give to the Association her experience in Girl's Work. She will do what might be called 'laboratory work' with clubs in Tokyo and will put her findings into form for use more generally in the other Associations of the country.

On Sunday afternoon, October 31st, the Association girls who gave their splendid assistance during the Sunday School Convention Bazaar were entertained at Mrs. Shidachi's home in the suberbs of Tokyo. A short vesper service was led by Kato San, tea and cakes were served, and the report of the Bazaar was heard. It was a very happy two hours for everyone and very

secretaries-Miss Yonezawa, who married Rev. Baba of the Presbyterian Church of Kobe, and Mrs. Otsuka, who married Mr. Otani of Tokyo, a Christian business man who is connected with the Home Department and active in church work. The Kobe Association is establishing a record for marriages from its staff. Esther Nixon Dixon changed merely one letter of her name.

Just a glimpse of the Hyde party on the 30th and a good visit with Miss Scott; also a tea party attendd chiefiy by foreign community women, in her honor.

English women missionaries to China and Japan, and two Russian girls, have been house guests at the Association recently. The Russian girls were stranded and the Association had the privilege of helping them until they reached their destination in Peking, A first lieutenant in the Hungarian army also arrived at the residnce and asked for accommodations for his twenty men, released war prisoners, until their boat should sail. He was conducted to the Y M C A, where the men were cared for in their dormitory. As he reached it, he said, thoughtfully, "Y M C A—Y W C A! For what is the 'W'?" "For 'women'" "Ah, pardon! I made a great mistake."

OSAKA Y. W. C. A.

Osaka was fortunate in beginning the fall work with at least the secretarial vacancies filled, for there have been many vacancies among the volunteer workers. New helpers are continually needed to conserve the great interest created by the pageant in June and to meet the needs of the new girls who are coming into classes and clubs, and some of the desired leaders are being found. A new sense of the depth and value of Association membership came to us from the life of Nakamori San, a member of the Businese Girls' Club and of the nightschool, who died early in the fall. She had been intensely interested in the pageant and greatly disappointed when illness prevented her from taking part in it, but She said, "Perhaps God wants me just to lie here and pray about it." She was haptized during the summer in Kita Presbyterian Church, Osaka. The Association held a memorial service for her which had a clear message of the abundant life to her family and Association friends.

The South had a visit for Miss Jane Scott. It was good to have enough of her time for a beginning of real personal acquaintance with the Board members and the Association situation and needs. Prospective sites for the new dormitory are being weighed by the Building Committee in consultation with other Board members. The tri-city secretarial meeting was held at Osaka, Nov. 13, with most helpful discussions and some decisions as to future policies and plans. The special Meiji shrine holidays were made the occasion for an Association house party at Homadera in a delightful house put at our disposal by an Association friend. Several business girls. teachers and girls of leisure attended, and two talks on Christian life and service were given by leaders in social welfare work.

The following program is being carried out for the Week of Prayer, with everyone working hard for its entire success:

Saturday, Nov. 13—Preparatory meeting at Temma Church, 2.30 P. M. Scenes from Association work in other lands, given by a new student club, Address by Mrs. Yamamoto

Sunday, Nov. 14—Devotional meeting in charge of Student Club Address by Nakaji San

THE YOUNG WOMEN OF JAPAN
(JOSHI SEINEN KAI)

Vol. XVII December 1920 Number 12.

NATIONAL

Natural Headquarters is now housed in a new home, a small three story office building at 16 Itchome Nishikicho, Kanda, not far from the building of the local Association in Tokyo. This new building gives ample space for tne present staff and is so arranged that with very little work room for an increased staff can be provided for, as needed. At present, the first floor is used for the main business office, and on this floor there are also tables and chairs for the use of visitors. On the second floor are the offices of Miss Kawai and Miss Jane Scott; and on the third floor are the Committee rooms and the office of Miss Asai, editor of the magazine. There is a very general expression of approval of this new home of the National Committee for Japan.

Monthly secretarial staff meetings have been planned, for the purpose of study and discussion. The first meeting of the southern group was held in Osaka November 13. The group from Tokyo and Yokohama met in Tokyo on the November 2.

KOBE Y. W. C. A.

Following the Gotemba Conference the staff, (which now has a new member-Miss Nakamori, office secretary, a gift from the Yokohama Association,) spent the month in setting up the program for the year. Miss Lelia Lacy came to us from the Tokyo Association for September 24 to 26. The business girls' clubs were greatly stimulated by her visit. Meetings of the Princess Club, the Mokusei Club, and of a group of mature business and professional women, were held with her, and the latter group is to organize a club in the near future. At its October 19th meeting Mr. Kawakami, (whose wife was formerly Miss Hiraiwa a secretary in the Tokyo Association) led a discussion on Current Events. Mr. Kawaka-is a professor of Commercial Law in Kanzai Gakuin. Business women, nurses, physicians, teachers, social workers and so on, will meet together in this new club. One of the women physicians who attended the vesper service at which Miss Lacy spoke, Dr Shidehara was a sister of the Japanese Ambassador at Washington. Dr. Shidehara is an enthusiastic member of the Association.

The first week in October the day and evening classes began, and there are now fifteen teachers on the Association staff, among them Mrs Kawakami, and Mrs Swan of the YMCA, who has an especially popular cooking class, Several Kobe College teachers, including Mr. Iizuka, Miss Shoharra, Miss Branett and Miss Ilsley, teach in the night school and Miss Ilsley is starting weekly choir practice. The sewing class is also very popular.

At a recent vesper service Madame Hata, who became a Christian thirty-seven years ago in Tadotsu, being then a widow with seven children to support, spoke from the point of view of a very old lady, about why she became a Christian. Her presence and her words were very impressive.

On September 27th at 6.30 P. M. occurred the weddings of two of our

DAISEIYA HOTEL

Honcho 6 chome, Yokohama Japan,

Phone. 953,2813. Honkyoku

御歸朝並に御渡航上に就ては萬事丁寧親切に御取扱申上候、尚御歸朝の際は 無線電信にて 御通知被下候はゞ 御出迎可仕候

歐米各國汽船乘客貨物取扱所

廣島縣海外協會指定旅館

熊本縣海外協會指定旅館

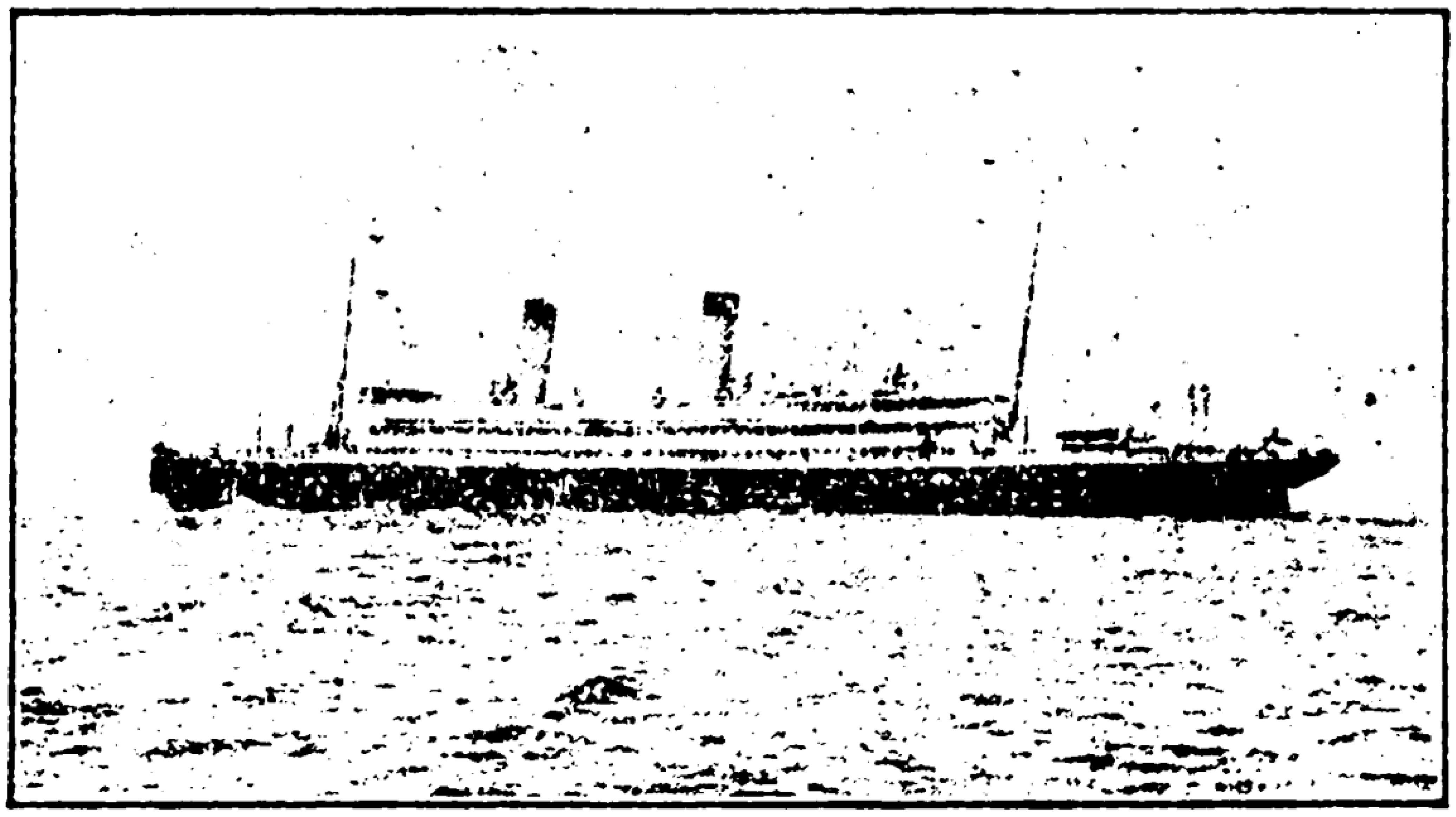
大勢屋旅館

横濱市本町六丁目（櫻木驛前）

電話本局 長 九五三 二八一三

弊館は最新式 四層建築にして 各室電話の設備を有し歐米視察御旅客並に御携帯品、貨物等の取扱には最も高評を博し居り候

東洋汽船株式會社



本社 東京市麹町區永樂町二丁目一番地（電話一五三〇、一五三二 丸ノ内一五三一、一五三三番）

營業所 横濱市山下町五番（電話本局 四四〇〇、四四〇一、四四〇二、四四〇三番、四四〇四）

出張所（神戸市京町八三番。香港、キングス、ビルヂング。上海四川路ノース、チャイナ、インシュランス、ビルヂング。マニラ、チャコビルヂング。桑港、マーケット街六二五、マーチャンツ、ナショナル、バンク、ビルヂング。紐育、ブロードウエイ、一六五。ホノルヽ、アレキサンダー、ヤング、ビルヂング。）

北米航路（桑港、布哇ホノルヽ、横濱、神戸、長崎、上海、マニラ、及香港間）

本航路は太平洋航路中氣候温和、海上平穏なること第一にして船舶の巨大、設備の完全、待遇の懇切とに由り航海最も安全且つ愉快なり

天洋丸	三重螺旋タービン機	排水量	二二、〇〇〇噸
春洋丸	同	同	二二、〇〇〇噸
コレヤ丸	双螺旋機	同	二〇、〇〇〇噸
サイベリヤ丸	同	同	二〇、〇〇〇噸
波斯丸		同	一九、〇〇〇噸

南米航路（香港、門司、神戸、横濱、布哇、桑港、羅府、墨國、巴奈馬、秘露及智利諸港間）

本航路は東洋南米間唯一の定期航路なり

安洋丸	排水量	一八、七〇〇噸
紀洋丸	同	一七、二〇〇噸
靜洋丸	同	一四、〇〇〇噸

各寄港地及各國樞要都市に代理店の設置あれば船室保留並に發着日割等は最寄に就て御問合せを乞ふ

女子青年界第拾七卷第十二號（毎月一日一回發行）
大正九年十一月廿六日印刷納本大正九年十二月一日發行明治卅七年五月七日第三種郵便物認

復刻版　女子青年界　第11巻

1992年10月9日発行

本体価格　22,000円

発行者　船橋　治

発行所　不二出版
東京都文京区向丘1-2-12
〒113　☎03(3812)4433

印刷所　三　進　社

製本所　青木製本所

中性紙使用

乱丁・落丁はお取り替えいたします。